603
252. 5-207
1200501343228
52.5
207

始

お母様のお話

養教の供子と

蘆谷蘆村著

日本童話協會出版部

252.5-207

緒言

子ども、殊に幼兒の心の糧として、おはなしにまさるものがないといふことは、誰でも知つてゐることであります。おはなしは、話すこと、聞くこと、それ自らが大切な教育的仕事である上に、その內容には藝術的要素も、科學的要素も、また道德的要素も、ゆたかに含まれて居り、子どもの叡智をひきのばす上に於て、この位役立つものはないのであります。

本書は、幼兒の教養と、お話と、どういふ風な關係があるか、どういふ風にして、お話をすべきであるかといふことを、極めて平易に說明し　若干の話例をあげたのであります。これは主として、家庭にいらつしやるお母樣、小さい弟や妹をもつていらつしやるお姉樣、それから幼稚園の娘姆さん方に讀んでいただきたいと思つて執筆したのであります。

私は、かういふ問題について、たび〳〵娘姆さん方や、お母樣がたに講演をする機會に接しました。さういふ機會に於て出て來る問題は、大抵この中に取扱つてありますが、まだ私として斷案を下すことの出來ない問題も若干はあります。さういふ問題については又、時を改めて

執筆いたすことがありませう。

本書を編纂するについて、よい話材を提供して下すつた上澤謙二氏、高山敏子氏、また筆記を手傳つていたゞいた佐倉ひさ子氏、矢野炃子氏、美しい裝幀を以て本書を飾つて下さつた黒澤武之輔氏等にお禮を申上げます。

昭和八年十一月

日本童話協會に於て

著者

目次

第一章　緒言に代へる小説……一
第二章　此の小説は何を教へるか……二
第三章　子どもの生活に入れ……二三
第四章　子供は何故お話を好むか……三五
第五章　お母様のお話にはおつぱいの味がある……四五
第六章　家庭でのお話の仕方……五三
一、年齢によつてお話の要求がちがふこと……五三
二、幼兒の話は形が不完全でも差支ない……五七
三、擬聲の大切なこと……六二
四、韻律の大切なこと……六五
五、くりかへしが必要なこと……七五

六、お話の途中で問答をすること……七八
七、お話は實感的で且つ活動的であるべきこと……七九
八、繪ばなしと人形ばなし……八二
九、お母様はお話を改作する權利があること……八七
第七章　童話の教育的意義……九四
第八章　子どものアニミズム……一〇一

家庭のおはなし　例話集

一、お八つのむぎ……一一〇
二、雨の子供と涙の子供……一一四
三、白い蝶……一一九
四、小川のうたとをどり……一二六
五、鳩ポツポが眠るまで……一二九

六、汽車ポツポと乘合自動車……一三三
七、大水のはなし……一三六
八、新しい電車……一四一
九、ひい子ちやんのおはなし……一四三
一〇、狼と子山羊……一四九
一一、チツクさんとタツクさん……一五三
一二、狐とライオン……一六四
一三、めん鳥と小麥……一六八
一四、風の子供……一七一
一五、目と耳と口……一七三
一六、自慢くらべ……一七四
一七、賣られた熊……一七七
一八、大男の娘……一八二

一九、お菓子の家……一九一
二〇、拇指トム……一九六
二一、ワタシ……二〇〇
二二、びんの中の大男……二〇四
二三、ジヤツクのおみやげ……二〇八
二四、目玉をとられた鬼……二一二
二五、山犬と駱駝……二一七
二六、大きなかぶら……二二二
二七、お坊さんの失敗……二二六
二八、これからあとのため……二二九
二九、りこうなベツス……二三四
三〇、メンドリとウスとミツバチの話……二三八
三一、ばかむすこの話……二三八

三二、ハンスの帽子……二六四
三三、王女とにせ王女……二六九
三四、かしこいむすめ……二七九
三五、お指の小人……二八一
三六、王様と正直な羊飼ひ……二八七
三七、小雪と小花……二〇四

お母様のお話と子供の教養

蘆谷蘆村

第一章　緒言に代へる小説

今から五六十年ほど前のこと。

イギリスのデボンシヤイア州のコモルチンといふ村に、古い大きな邸宅がありました。長い間空家であつた其の家に、ある年、ジョン・ウエリスクート氏といふ貴族の一家が住むことになつたのです。主人夫妻と、一人息子の十三歳のリオネルと、二三人の召使ひだけで、まことにひつそりと靜かな家でありました。

ウエリスクート家が、都を離れて、この不便な田舎に引込んだのは、仕事に失敗したからで

も、貧乏なためでもなく、たゞ、息子リオネルの教育のためでありました。何といふ矛盾でせう。子どもを教育するために都會に出るといふなら分つてゐますが、反對に田舍に引込まうといふのです。今日のお母樣がたのお考からは、不思議な謎でありませう。

その頃のイギリスには、斯うしたことがあり勝でした。ウエリスクート氏は、その頃のイギリスのいはゆるインテリ階級の代表的なものでありました。スペンサア、ハックスレーなどの功利主義、實證主義の教育說が盛んに起つた此の國では、冷かな主知的教育法が勢を得てゐましたが、ウエリスクート氏はさういふ教育法の信奉者でありました。

ウエリスクート氏は、息子のリオネルを大學者にしようと考へました。その爲には、科學的な知識を與へること以外のことは全然不必要だと考へました。宗教や藝術などは痴人の寢言です。詩歌は、たゞ語學の練習のためのものだから、ギリシヤやラテンの古典を敎へれば澤山、お伽噺の木などは絕對に子供に與へてはならないといふのが、ウエリスクート氏の主張です。かういふ教育を施すためには、特別な方法が要ります。普通の小學校へ出席させれば、その頃の規定で、禮拜に出席しなければなりませんから、教育上に有害な迷信をおぼえるでせうし、平民共の子供に交つて、つまらぬお伽噺や遊戯に耽るにちがひない、と考へたウエリスクート氏はさびしい田舍の、友達の出來る機會のない、この一軒家を借り、家庭教師を雇つて、リオネルを教育することにしたのです。さうして、きちんと日課をきめて、朝から晩まで嚴重な注入的教育をやらせ、少しでも遊んだり、怠けたりすることを許さなかつたのであります。

このやうな恐るべき教育方針の對象となつたリオネルは、どういふ子であつたでせう。彼は非凡な天才的少年でありました。まだ十三歲にしかならぬ彼は、立派に中學卒業の學力をもつてゐました。

リオネルの教育のために雇はれた家庭教師のモントロスは、スコツトランド生れの、當年二十七歲の青年で、快活な、眞面目な、模範的な教育者でありました。モントロスはリオネルを弟のやうに愛し、リオネルも先生を二つなきものに慕つてゐましたが、父親のウエリスクート氏は、モントロスを氣に入らないのでした。といふのは、モントロスが基督教信者であるといふことと、その教育の仕方があまり自由主義だといふことのためです。ウエリスクート氏の目から見ると、モントロスの遣り方は、なまけ者をこしらへるとしか見えませんでした。で、と

う〳〵、モントロスを解雇して、その代りにゴール博士といふ老學者を先生に賴みました。

モントロス先生が、國にお歸りになる日、リオネルは驛遞馬車の停留場まで、先生を送つてゆきました。涙ながらに別れを告げて、歸つて來ようとする途中、大きな墓地に迷ひこんだリオネルは、突然かたはらの土の中から、眞白な頭が飛び出したので、大さう驚きました。それはルーベンといふ墓掘りのお爺さんで、掘りたての穴から首を出したのです。リオネルは、あたりの石に腰をかけて見てゐますと、ルーベン爺さんは、穴を掘り終つて出て來ました。さうして、リオネルの傍に腰をかけて、いろ〳〵な話をしました。

リオネルは、ルーベンお爺さんが、人間には一人々々に靈魂があるといふことを眞面目に話してゐるので、驚いてしまひましたが、ルーベンお爺さんは、また、この小さな子供が、靈魂だの、天國だのといふことは皆嘘つぱちだ、と議論をするので一層驚きました。

そこへ、愛らしい少女が、ルーベン爺さんの爲に、コーヒーとパンとをもつて來ました。それはルーベンの娘のヂヤスミンです。リオネルは、すぐに、ヂヤスミンと仲よしになり、二人して墓のまはりをかけまはつたり、聖堂へ入つて、聖書をあけて見たりしました。リオネルがヂヤスミンに、ギリシヤ語で習つたトロイの戰爭のお話をすると、ヂヤスミンはまた Tom Babies in the Woods（森の中に捨てられた可哀さうな子供たち）のお話をしました。やがてルーベン爺さんが二人をよびに來たので、一緒にその家へゆきますと、質素な午飯が二人をまつてゐました。リオネルには、その食事がどんなにおいしかつたでせう。食事がすむと、二人は木馬にのつて、さん〳〵にあばれました。

この一日で、リオネルの目の前には、新らしい世界がひらけました。つめたい、暗い、陰鬱なウエリスクート家から、一歩外に出れば、そこには溫い、生きた、人間の世界があるのでした。快活な、平和な、賤民の生活……無邪氣な、單純な、老人や子供の信仰……リオネルは今まで知らなかつた世界に觸れることが出來ました。彼は喜びに身も輕く、モントロス先生に別れた悲みをもうち忘れて、夕方おそく自分の家に歸りました。

けれども、お家では、リオネルがゐなくなつたといふので邸宅中ひつくりかへるやうな騷ぎをしてゐる最中でした。そこへ、リオネルが入つてゆくと、お母樣は飛び上つて喜びました。

しかし、お父様は、リオネルの一日の行動を問ひ訊し、無斷で遲くまで外出してゐたばかりでなく、賤しい平民共と交際したのを怒り、その日は一室に監禁して、食事を與へませんでした。

その翌日から、リオネルは、新らしく來たゴール博士について教育をうけました。ゴール博士は、ウエリスクート氏の理想の先生でありました。先生は、リオネルに恐ろしい注入主義の教育を施し、朝から晩まで、寸分の隙もなく勉強をさせたのです。

ある日のこと、リオネルのために何より嬉しい休日が來ました。其の日ウエリスクート氏は何か用事が出來たので、ゴール博士を伴れて、ロンドンにゆき、夫人も用事があつてお友達を訪問するといふので、リオネルがお留守番をいひつかりました。リオネルは、絶對的に邸の外に出ないといふ誓約をして、留守番をひきうけたのです。

滅多に與へられたことのない休息の時間を、リオネルは此上もなく喜んで、邸の中の小徑を歩きながらヂヤスミンやルーベンのことを考へてゐますと、突然『リオちやん、リオちやん』

といふ聲がきこえます。ふりかへつて見ると、ヂヤスミンの可愛らしい顏が、垣根の穴から、こちらをのぞいて見てゐるのでした。思ひがけない珍客に、リオネルは大よろこびで、ヂヤスミンを招き入れ、いろ〳〵なお話や、遊びに時の移るのを忘れました。けれども、夕日が次第に西の山の端に傾き、別れなければならぬ時が近づいて來ると、ヂヤスミンの聲は、何となく悲しみを帶びてきこえ、リオネルは自然と涙のあふれて來るのを感じたのです。リオネルはふるえる聲で、

『ヂヤスミン、どうしたの。』

自分の心のさはいでゐるのを隱さうとして、ヂヤスミンの髪の毛の、木の枝にひつかゝつてゐるのを解きながら、ききました。ヂヤスミンは

『私もう何だかあなたに逢はない樣な氣がしてならないのよ。』

といつて、綠色の目を、すみわたつてゐる空に向けました。恰も天上で、何か怪しいものが、彼女を招いてでもゐるやうでありました。

リオネルは、彼女の小さい手を取つたが、心臟はにはかにはげしく皷動しました。

『ヂヤスミンさん、あなた、そんなに心配しなくてもいゝですよ。なに、これから又後にあなたに逢はれますよ。私はコモルチンを去つても、あなたを忘れなんかしない。大きくなつたらきつと又時々あなたのところへ來る。』

ヂヤスミンは、たゞ默然として、その眼をリオネルの方に注いでゐましたが、

『リオさん、あなたが大きくなるまでには、まだ〳〵大變の月日がかかりますのよ。』

と言ひました。

リオネルも默つてじつと考へてゐました。

リオネルはヂヤスミンの前にしやがんで、その手を握つてゐる、ヂヤスミンは、默つて、大きな、光る目をみはつて、リオネルの顏を見てゐる。二人は、何とも分らぬ、不思議なことが、ひしひしとその身に迫つて來るやうな氣がして、不安の念にうたれてゐました。

やがて、ヂヤスミンは、別れを惜しみながら、家に歸つてゆきました。

その晩のことです、リオネルが、ぐつすりと眠つてゐると、誰か自分の名を呼ぶものがあります。はツと目をさましますと、寢臺の傍に立つてゐるのは、母親でありました。母はリオネルに向ひ、自分は、とてもお父樣のやうな冷たいお方と一緒に生きることは出來ないから外へゆくのだ、と告げ、リオネルが止めるのもきかずに其夜中に家を出てしまひました。その時、自分の形見にといつて、フランスからわざ〳〵とりよせた、立派なリボンをリオネルにのこしました。あたりまへのお母樣ならば、たゞ一人の息子を、冷かな父親に任せて、逃げ去つてしまふことは出來なかつたでありませう。息子のために、自分の生涯を犧牲にするのが、母性愛の當道でありませうが、このお母樣の場合には、その母性愛が、自分の苦痛を克服することが出來なかつたのです。

『リオネルや、私は本當に運が惡いのですよ……お前のお父樣は大層智慧のある、そして品行方正な方ですよ。智慧の方でも、道德の方でも、私等とは迚も比べものにならないのですよ。ですからあの方と一緒にゐるのは、私にとつて非常な苦みです……あの方は、私が歌を唄つたり、樂しんだりすることを好かないのです、丁度お前が外の子供と遊ぶことをお許しにならないやうに、……私はまだ本當の生活といふことを知りません。』

といふのが、母の告白でありました。それにしても、一人の愛兒を遺して、家を出るといふことは、夫人にとつて、どの樣に後髮ひかれることであつたでせう。

あくる朝、ウエリスクート氏は、ゴール博士を伴うて、何ごとも知らずに、ロンドンから歸つて來ました、そして、初めてその妻の出奔を知つた時の憤怒といつたら、譬へ樣もありませんでした。そればかりでなく、妻に對する怒りを子に移して、口ぎたなくリオネルを罵りましたので、流石のゴール博士すら、ウエリスクート氏の慘酷をたしなめた程です。リオネルは愛する母の恥しめらるゝに堪えず、狂氣のごとく家を走り出して、モントロス先生の知合であつた一婦人の家に行つて、昨夜の出來事を訴へましたが、それが終ると其場に卒倒してしまひました。

リオネルは此時から病に罹つて、容態が次第に重つて來ました。醫師は轉地療養を切に勸めましたので、ゴール博士が附添うて、クレウエリの海岸に轉地をさせることになりました。昨日までの先生は、リオネルの友達になつて遊ぶことになりました。さうしてゐる中に、博士の心は、リオネルに對して不思議な愛情が湧いてきました。さうして、嚴格一點張りの、今までの教育法に對する自信が崩れて來ました。

十二日間海岸で靜養してゐたおかげで、リオネルの容態は大へんよくなりましたので、またコモルチンに歸つて來ました。その日、リオネルは、ラテン語の復習をするといひ出しましたが、ゴール博士は、今日一日はまあ學課を休むがよからうといひましたので、リオネルは久しくあはないヂヤスミンにあはうと思ひ、喜び勇む足を躍らせて、ルーベン爺さんのところへゆきますと、豈はからんや、ヂヤスミンは、流行のヂフテリーにかかつて命を取られ、其の日丁度お葬式をするところでした。

『リオさんによろしくいつて下さい。私はリオさんを愛してゐます。』

といふのが、ヂヤスミンの遺言でありました。

憐れなる少年の心は、全く破れてしまひました。彼は其の夜、母の形見のリボンを以て縊死したのであります。その遺骸は、少年の遺言により、ヂヤスミンの墓に並べて葬られました。

ゴール博士はその側に立つて慟哭したのであります。

第二章　此の小説は何を教へるか

前章にあげたのは、イギリスの閨秀作家メリー・コレリ女史の作の梗概であります。コレリ女史は、其頃のイギリスの教育法が、子供を殺すものであることを憤慨し、この小説によつて、自分の主張を述べ、當時の教育者のやりかたを攻撃したのであります。今日の日本には、ゴール博士や、ウエリスクート氏のやうな人の少なく、日本の子供には、リオネルのやうな可哀さうな子供は見當らぬのでありますが、お話の順序として、コレリ女史が、英國の教育法の、どういふところを攻撃しようとされたかを考へて見ませう。

人間は、善いことをしてゐる積りで、却つて悪いことをしてゐることが甚だ多いものです。ウエリスクート氏は決して悪人ではありません。彼は立派な紳士でありました。彼は嘗て不道徳なことをしたことがありません。彼は知識的に見ても、道徳的に見ても、まことに立派な人であります。況して親として、子を愛さぬ筈はありません。愛すればこそ、其の子の教育のために、すべてのものを犠牲にし、都を離れて不便な田舎に引込んだのであります。それまでにして、子供を教育しようと骨折つた結果が、かへつて愛兒を殺すに至らうとは、ウエリスクート氏も思ひがけなかつたでありませう。

さらば、何が、彼をして然らしめたか。

第一には、ウエリスクート氏が子供を知らなかつたことです。

子供は小さい人間だ、といつたら、誰も其の通りだといふにちがひないのですが、本當はただ小さい人間なだけではないので、まだ人間になりきらない、未完成な人間なのです。

それですから、大人と比べると、一通りでない違ひがあるのです。たとへば、お玉杓子と蛙のやうなもので、お玉杓子は蛙の子にはちがひないのですが、小さい蛙ではない、つまり未完成な蛙です。

蛙は口がとがつてゐて、ピョン〳〵と跳ねまはる。お玉杓子は頭が圓くて、尾が長くて水の中を泳ぎまはる。一見まるで違つてゐるが、しかし本質的には同じものであります。お玉杓子がなければ蛙は出來ず、蛙がなければお玉杓子は出來ないのです。お玉杓子なんてへんなものだ、おれはそんなものに關係がない、と、蛙がいつたならば、お笑ひ草ですが、世の中には、

この蛙に似た人間が多いのです。つまり自分がお玉杓子であつた時分のことをすつかり忘れて、生れた時から成人ででもあつたやうな積りをしてゐる人間が多いのです。どんな人でも、一度は必ず子供だつたので、大人のまゝでお母さんの腹から生れたといふものはありません。尤も、支那の聖人の老子といふ人は、八十年の間お母さんのお腹にゐて、生れる時には、皺くちやになつて、杖をついて出て來た、それだから年とつた子――老子と名をつけたのだ、などといふものがありますが、これはヨタでせう。歴史的には絶對的に承認できぬ話であります。

人間といふものは實に微妙なものではありませんか。お母様のお腹に、赤ちやんが宿つた時には、人間でも何でもなく、魚でも、蟲でもなく、一ばん小さい、一ばん原始的な生物であるアミーバの姿で宿るのです。そして十月たらずの間、お母さんの胎にゐる間に、アミーバから高等動物まで、何億年といふ生物の歴史を再現して後、おぎやあ〳〵と生れて來るのです。さうして、その赤ン坊から、一人前になるまで二十年ほどの間に二十萬年にあまる人類の歴史をまた再現するのです。口もきくことの出來ない嬰兒には原人の姿が見られます。あばれざかり、いたづらざかりの幼兒には、野蠻人の姿が見られます。その間に、知識の芽は次第にのびて、頭腦が發達しつひに文化人の仲間入りをするやうになるのであります。われ〳〵の一生の歴史に、人類の歴史が、かうまざ〳〵と見られるといふことはありがたいことではありませんか、その限りなき發展、微妙な、いのちの伸張、そこに神のみわざがあり、如來の大道があるのです。それを雲煙過眼視する人は、お玉杓子を知らない蛙のやうなものです。

動物とかはりのない原始人の生活、それはわれ〳〵から考へると無價値なもののやうに思はれます。年が年中爭鬪と亂舞に明け暮れてゐる、迷信と無智の野蠻人の生活、それはわれ〳〵から考へると、まことに馬鹿げたものです。けれども、さういふ無價値らしく、馬鹿々々しい生活がなければ、われ〳〵の今日の存在は生れなかつたのです。幹がなければ枝がなく、枝がなければ葉もなく、花もないと同じやうに、原始人の幹から、野蠻人の枝が現はれ、つひにその尖端に文化の花が咲き匂ふやうになつたのであります。その通りに子供も一足飛びに大人にすることは出來ません。子供は、子供としての生活を、完全に生活し、さうして後に成人となるのであります。われわれは、子供の生活を尊重することによつて、はじめて、子供を育てることが出來るのであります。

悲しいかな、ウエリスクート氏は、此の事を知りませんでした。彼は、子供の生活といふものを、全然考へてゐなかつたのです。彼は、お玉杓子を笑ふ蛙でありました。彼は、自分の子のリオネルを、自分と同じものと考へ、子供からいきなり成人を造り出さうとしたのです。そこに根本的な誤謬がありました。

つぎに第二の誤謬は、教育の秘訣は、否、むしろ生活の秘訣は、喜びにあるといふことを、ウエリスクート氏が知らなかつたことであります。

人間が生きてゆく力は、何にあるかといはゞ、生くることに喜びを感ずるからであります。苟くも人間と生れて誰か喜ばしく生くることを欲しないものがありませう。現實の世界は、さう喜びばかりではないが、その中に尚且喜びを追求し、たとへ苦みや悲しみがあつても、それを克服することに喜びを見出し、努力奮闘してゆくのが人生であります。子どもは、成人のやうに知識がなく、物の考へ方が發達しないのでありますから、たゞ、感覚的に、感情的に喜ばしいことでなければ、味はふことが出來ませんが、とにかく、子供を健全に育てるには、子供を愉快に生活させるといふことが必要であります。勿論子供といへども、時に苦痛を味はせることは必要で、その經驗によつて、仕てよいこと、わるいこと、を判別してゆくのですが、それは僅少の例で、多くの場合、子供はできるだけ愉快に育てるべきものであります。

生活は遊戯ではありませんが、人間は誰しも樂しく生くることを主張する權利があります。人間の生活は、出來るだけ興味的でありたいものです。同じ生きるならば苦しんで生きるよりは、樂しんで生くべきであり、同じく職業に從事するにしても、義務だと思つていやゝつとめるよりも、樂しんでつとめる方が、能率も上り、肉體的にも健康になるのであります、成人でさへさうであるとすれば、子供に於ては尚更のことであります。そこで、子どもを教育するには、子供が、どういふことに最も多くの喜びを感ずるかを明かにして、それを利用することが大切であります、たとへば

5－3＝2

といふ算術を、そのまゝ公式的に子供に教へたとて、子供は何の喜びをも感じはしません。もしもそれを

花子さんが、おばさんにお林檎を五ついただきました。まつかな〳〵大きな林檎、まあ、

おいしさうだわね。さあ、太郎さんに一つ分けてあげませう、次郎さんにも一つ分けてあげませう、私も一つたべませう。太郎さんと、次郎さんと、花子さんと一つづゝ、そのお林檎をたべましたよ。あとにいくつのこつてゐるの。

と問うたならば、子供は、その問ひに對して、既に喜びを感ずるでありませう。それは、赤い林檎を聯想する美感、そのおいしさを聯想させる食慾等が、子供たちの心に多大の刺戟を與へるからであります。もしも更にこの問を、次の如くして見たらどうでせう。

桃太郎さんが、鬼が島へ鬼征伐にゆきましたよ。お爺さんと、お婆さんが、黍團子を五つこしらへて下さいましたよ。ほうら、一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、（黑板に繪をかく）

桃太郎さんが、それを袋に入れてゆきますと、向うから大きな犬が來て、「桃太郎さん、桃太郎さん、お腰のものは何ですか」といひました。「これは日本一の黍團子ぢや」「一つ下さい、お伴しませう」といひますから、そーら、一つ黍團子をあげましたよ。その次には、猿が來てまた黍團子を下さいといひましたから、また一つあげましたよ。さうすると今度は雉が來て、又お團子を下さいといひましたから、又一つお團子をあげましたよ。

犬さんが　一つ
猿さんが　一つ
雉さんが　一つ
みんなで　三つ

さあ、袋の中には、いくつ殘つてゐるでせうね。

かうなると、子供は黍團子の美味に、その食慾を喚ぶばかりでなく、犬と、猿と、雉と、彼等の大すきな動物の出現に興味を感じ、單純な算式でない、一つの話の中に、彼等自身の生活が同化して來ますから、もはや算術が面白くてたまらなくなつて來るのであります。

興味のないところに、敎育の成功はありません。子供が興味をもつことそれ自身が敎育の成功であります。

これは、算術を一例として取上げたのでありますが、算術ばかりではありません。子どもの全生活が、敎育の對象とされなければならないのです。ただ、敎科書にのみ、知識の注入にのみ、敎育があると考へたならば飛んでもない間違ひであります。さうして、いかに子供がその

生活に愉悅を感じてゐるかを觀察し、その點に敎育の基礎をうち立ててゆかなければならないのです。悲しいかな、ウエリスクート氏は、此の事を少しも知りませんでした。彼はその子から、生活の愉悅の源泉である、お話や、遊戲や、スポーツや、歌や、踊りや、樂しい想像やを取り上げ、その代りに冷たい敎科書のみを與へたのであります。

第三にウエリスクート氏の誤つてゐる點は、敎育の理想は、智情意の圓滿なる發達にあるといふことを知らなかつたことにあります。

人間は知識ばかりで生きて居られるものではありません。人間には感情があります。そして、この感情なるものは、强烈であり、本能的であり、盲目的であり、より多く人間の行動を支配するものであります。この感情を虐げず、殺さず、理性により指導し、知識により淨化してゆくところに、本當の人間の生活があるのであります。感情にのみ走れば誤りを起し易い。羅針盤のない船のやうなものです。しかし、感情がなくして、理智ばかりでは、生きてゆく上に力がない。羅針盤ばかりで推進機のないやうなものです。昔の道學先生は、理性を以て至上のものとし、感情に重きを置かなかつた。否、感情に支配せられることを人間として恥づべきことのやうに考へてゐました。近代の主知主義者は、知識を以て無上のものとし、感情生活といふものに盲目であつた。人間の生活の根本にあるところの、最も大きい力である感情といふものを認めなかつた。そこでウエリスクート氏のやうな誤に陷つて來るのであります。ウエリスクート氏は立派な學者であり、道德家であり、何一つ批難せらるるところのない人でありましたが、人間としては不具者でありました。何故かといへば、感情の點に於いて缺けてゐたからであります。人間は神樣ではありません、學問をするための器械でもありません。畢竟するに人間は人間であります。人間として生きること、これ凡ての人に共通な欲求であつて、學問も、宗敎も、道德も、つまるところは、人間が人間として生きるためのものであります。

人間の幸福の基は何にあるかといへば、智情意の圓滿な發達をなし、人性全體にわたつての凡てを完全に把握することであります。智情意のいづれに偏するも、必ずやそこに何等かの缺陷を生じつひには生命の破綻にまで至るものです。それゆゑ敎育は、此の三つの方面に亘つて偏頗なく行はれなければなりません。然るにウエリスクート氏は、愛兒リオネルに對し、ひたすら知識的敎育を强制し、その感情的方面を等閑に附したといふよりは、寧ろ殺してしまふこ

とに努力したために悲しむべき結果を將來したのであります。

さて、翻つて考へますのに、もしも、ウエリスクート氏夫人が、もう少し賢明な婦人であり愛兒に對する熱愛があり、また夫を動かすだけの力があつたと假定したならば、このやうな悲劇は起らなかつたかも知れません。ウエリスクート氏が、恐るべき、頑迷な頭の持主であつたことは勿論ですが、子供の敎育については、母親がもう少し立入つて然るべきものです。否、母として、當然其の權利を、夫の前に主張してもよいと思ひます。それを一圖に夫の主義に盲從し、愛兒の敎育を家庭敎師任せにしておいたところに、夫人の失敗があつたのです、要するにウエリスクート夫人の凡庸な人の善さが、このやうな悲劇を起した原因の一つであります。

大きい子については兎も角、幼稚園から小學校へかけての子どもは、完全にお母樣の勢力の下にあるのですから、お母樣の敎育に關する考へと態度とが、子どもの生涯を形造るとに最も大きな力を及ぼすことはいふまでもありません。私は凡ての母親が、ウエリスクート夫人に倣はざらんことを切望して止みませぬ。

第三章　子どもの生活に入れ

子どもを敎育する上に於て、まづ必要なことは、子どもの生活を知ることです。成人には成人の生活があるから、子供の生活にかまつてゐられない、といふならば、もはや敎育者たり、母たるの資格はありません。成人も一度は子供であつたのですから、子供の生活を知つてゐなければならぬものですが、案外蛙は、お玉杓子の時代を記憶してゐないものです。そこで、われ〳〵は、子供の生活の中に、自ら進んで入つてゆき、自分の子供の時代を再現して見る必要もあるのです。

子供を育てるについて、何よりも第一に心得ておいていただきたいことは、何であるかといひますと、

こどもはあばれるものだ！

といふことであります。あばれるのが子供の持ち前なので、あばれぬやうな子どもは、肉體的にか、精神的にか、病氣であるのです。もしも、あなたのお子さんが、男のくせに女のやうにおとなしく、近所のほめものであつたとしたら、安心してはいけませんよ、さういふ子は、どうかすると、大きくなつてから不良兒になつたりし易いのです。もしも、あなたのお子さんが、近所中での餓鬼大將で、手のつけられないあばれつこで、しば〳〵近所からいたづらのお尻をもつて來られるやうであつても、決して悲觀するには及びません、そういふ子は、案外立派に成人するものです。

なぜ、子供はそのやうにあばれなくてはならないのでせうか。それは、子供が、小さい野蠻人であるからであります。

逞ましい體軀、隆々と節くれだつた手足、眞赤な、いや、むしろ銅色の皮膚、精力そのものであるといつてよい野蠻人たちは、どういふ生活をしてゐるでせうか。彼等の頭腦は極めて幼稚なものです。考へることは極めて少いのです。仕事はほとんどないのです。彼等は工場をもたず、銀行をもたず、學校をもたないのです。彼等には仕事がない。しかし、溢れるやうな精力がある。彼等の漲り溢れる精力は、仕事がないからといつて、彼等をじつとさせて、おかないのです。そこで彼等はさかんにあばれます。戰爭です。首狩です、狩獵です、亂舞です、食ふことです、飲むことです、歌ふことです。さながら百鬼夜行のやうな彼等の生活……しかし、そこにはそうなるべき理由があるのです。

子供もそれと同じことであります。子供の生活力といふものは、おどろくべきものであります。丁度、木の芽生えのやうな力、小さな草の芽が、大きな石塊をもちあげたり、甚だしいのは、石の中に穴をあけたりするやうな、おどろくべき精力が、子供の裏にはもえ立つてゐるのです。それだのに、子供には仕事がありません。たべることも、飲むことも、衣ることも、凡て親が爲てくれるのでありますから子供には爲なくてならないといふ仕事はないのです。それですから、子供はそのありあまつてゐる精力を何かに向つて發散しなければなりません。大人が見ると、何の必要があつて、あんなにあばれるのだらうと不思議に思はれますが、それは無用にあばれるのではなくて、どうしてもあばれなくてはゐられないのであります。さうして見れば、あばれつ子ほど、精力が旺盛なのであり、精力旺盛な子ほど、將來立派に育つといふこ

とは判り切つたことなのであります。

こんなことを、あるところで言つてゐますと、

『先生そんなことをおつしやつたつて自家の武雄みたいでも困りますね、お父様の大切な松の木にのぼつて枝を折つたり、やたらに棒きれで庭木をたゝいて廻つたり、花壇の土をこねくつて泥あそびをしたり、何ともかとも手におへません。もうちつとおとなしく遊んでもらへないものでせうかね。』とおばあ様の愚痴です。なるほど御尤もですが……。

『お宅のお庭には、定めし立派な庭木がおありでございませう。一本何百圓もする木がたくさんおありでございませうね。すばらしい盆栽も、おもちでございませう。けれども、武雄さんの木のぼりをなさつてもよいやうな木をお植ゑになりましたか。』

『え、武雄の木のぼりをする木ですつて？　阿呆らしい。どこの世界に、わざ〳〵木をうゑて、木のぼりをさせる人がありますかいな。』

『それ、それ！　それがお考へちがひですよ。おばあ様、旦那様の盆栽道樂も結構でせうが武雄さんの木のぼり道樂は、それよりも、もつと〳〵、生命的な、必要のある道樂なのです。ひろいお庭の片隅に、たつた一本でよろしいから、木のぼりのできる木をお植ゑになつたらいかがなものでせう。何十圓、何百圓といふ高價な木でなく、三圓か五圓の雜木でよいのです。』

といひますと、おばあ様、「怪しからん」といつたやうな顏付きで、煙草の煙をパクーリ〳〵です。

人間は、大昔から聖人君子であつたわけでもなく、文明開化であつたわけでもなく、大昔は、單純な動物であり、野蠻人であつたのですから、今日、實際に必要のないはたらきでも、動物であつた時代に、あるひは原人時代に必要であつたはたらきが、心の底に殘つてゐるのであります。年を老るにしたがひ、さういふはたらきは次第に消え、お玉杓子から鰓がなくなり、尾がなくなると同じやうに殆ど痕も分らぬやうになりますが、子供は小さい野蠻人ですから、さういふはたらきが、露骨にあらはれるのであります。子供が木のぼりを好むといふのも、その一つで、原人時代においては、木にのぼるといふはたらきは敵から遁れるために絶對的に必要なはたらきであつたのですから、その習慣が極めて強く子供の心に殘つてゐるのです。五六歳

から八九歳までの子供にとつて、木のぼりの魅力は非常なものです。木にのぼることによつて、彼等は心の裏に潜んでゐる古い本能を發散させ、そのために非常な滿足と喜びをおぼえるのであります。それは本能の力であります。殆ど無意識的に、本能に驅り立てられた武雄君が、お父さんの庭木の、登りよささうな枝ぶりを見つけ、勇躍して參りはじめると、いきなり青天の霹靂

『こらッ！　馬鹿もの！』

と來ます。笑ひごとではありません。これによつてうける武雄さんの心の衝撃は？

かうして、叱られ、叱られ、本能の活動をさまたげられた末は、武雄さんはきつと意氣地なしになり、内氣になり、日蔭の唐茄子みたやうな子になるか、反動的に不良性を帶びて來るでありませう。

『なるほど、聞いて見れば木のぼりも藥ですかな。うちの子は鳶人足にするつもりはなし木のぼりなんか出來なくてもよいと思つてゐましたが、木のぼりも何か役に立つものと見えますな。しかしまあ、玩具なんか、腐るほどあてがつて、少くとも遊びには事を缺かぬやうにしてあるのに、朝から晩まで、木のぼりだ、泥いぢりだと汚いことや、危いことばかりしてゐて、本當に氣骨が折れてなりませんわい。』と又してもお祖母様の愚痴です。

『さあ、その玩具がどんなものですかね。』とうつかりいふと、お祖母様

『え、玩具がどうですつて？』と、額が八の字、天候俄に險惡になりました。これは言ひ過ぎたな、と思つたが間にあひません。

『うちの武雄なんか、玩具に不自由するやうなことはありません。子供部屋に行つて見て下さい。大概の玩具屋には負けないほどいろ〳〵なものがあります。それだのに、子供たちは、ろくすつぽ見向きもしないのです。買つて來る時は。あれだこれだと大さはぎをするのに、二三日たつともう、けろりと忘れてしまひます。この間なんか、三越へ行つて、八圓も出して、まるで本當の汽車みたいな汽車を買つてきてやりましたのに、一週間も遊びはしません。本當に呆れてしまふ。』と、愚痴やら、自慢やら、判斷のつかぬお話です。

『なるほど、それは左樣でございませうが、おばあさま、お宅の武雄さんは、あまり玩具が上

等すぎるのでお遊びにならないのですよ。』

『それぢや、玩具は、やくざものゝ方が好いのですかい。』

『やくざものがよいといふわけはありませんがね。玩具といふものは、あまり立派に出來上つてゐるものよりも、どこか出來上らないものゝ方がよいのです。……ちよつとおたづねしますが、お宅のお子様は、本を並べて汽車にして遊びはしませんか。』

『えゝ〳〵、本當に左様ですよ。あの「兒童文庫」をもちだして、室中歩くせきもないほど並べて、汽車の眞似ですよ。その癖八圓の汽車なんか見向きもしないのです。』……又、八圓の汽車が出ました。

『そこですよ、おばあ様、その八圓の汽車は本物の汽車とちがはないほど、精巧に出來てゐますでせう。それはお立派なものにちがひありますまい。けれども、さういふ立派な汽車は、たゞ本物の形をそのまゝ子供に見せるだけで、子供の心の力を少しもはたらかせないのです。本物そのものを見るだけなら、いつそ本物の汽車を見ればよいので、玩具といふものは、たゞ本物の形をあらはすといふだけでなしに、子供のからだと心のはたらきを引きだすものでなければいけません。子供が本を汽車の代りにして遊ぶことをよろこぶのは本を汽車に見立て、それを動かして遊ぶところに子供自身の心のはたらきがあるからです。この子供自身のはたらきを無視した玩具は、たとへそれがどのやうに精巧に出來てゐようとも玩具としては落第なのであります。』

そこで、玩具のよしあしをきめる標準の第一として、次のことをおぼえて下さい。

おもちやは未完成のものがよろしい

出來上つたものよりも材料を與へるがよろしく、あまりに完全なものよりも、どこか不完全なものがよろしいのです。さうして子どもの創意を働かせるべきです。

積木が、教育上價値が重大だといふのは、其の理由が全くこゝにあるのです、それでありますから、同じ積木としても、家の形とか、車の形とかを、あまり精巧に、繪具をつかつてぬりたてたものよりも、むしろ彩色のない、或は極簡單に彩色した程度の四五種の形の木を、出來るだけ澤山あつめてやつて下さい。さうして子供の創意をつとめて各方面に働かせるのがよいのです。なまなか、初めからいろ〳〵な形を豫想させるよりも、自由な心の活動にしたがつて、

思ふ存分に造らせるのがよいのです。

次に問題となるのは、武雄さんの泥いぢりであります。お手々も着物も泥まみれにして炎天で泥いぢり、おばあ様の愚痴の種になるのも無理はないのですが。

あの泥いぢりといふ遊び……あれがどの位人間の文明と深い關係があるか、想像もつかぬほどであります。上野の山に聳えてゐる西郷さんのどんぐりまなこの銅像も、帝展の秋をにぎはす女神の裸像も、野蠻人の泥いぢりから發展したものです。私たちの毎日三度々々御厄介になつてゐるお茶碗も、お皿も、さては一個何萬圓といふ値のあるお茶の道具も泥いぢりの發展です。さうかと思へば、東京驛頭に、天を摩する丸ビル、海上ビル、郵船ビルの壯觀も、泥をこねつて煉瓦をつくり、そのかげに生命を托した野蠻人の仕事の發展です。さては丹那山や清水峠のどてつ腹に風穴をあける奇怪な鐵道工事、帝都の中央を一管のチューブでつきぬく地下鐵の工事、芝浦や川崎の大埠頭工事など、どれも皆、泥いぢりの發展でないものはありません。さうして見れば、武雄さんの泥いぢりも、將來、どのやうなものになるか計り知ることは出來ないのです。しかし、泥いぢりは、着物をよごすばかりでなく、土壤の中には、屢々有害な黴菌や、寄生蟲の卵子がをりまして癘疽の原因になつたり、皮膚の上から寄生蟲に寄生されたりしますから、泥いぢりそのものには贊成できません。そこで、泥いぢりの代りに、お砂いぢりをさせて、泥いぢりの本能を有效に發現させるのであります。

子供がお砂遊びをよろこぶことは、お話の外です。ちよつと道普請の砂が往來につんでありますと、忽ち町内中の子供が集まつてきて、めちやに〳〵かきちらしてしまひます。ブランコや、シーソーや、すべり臺などもよろこびますが、それらのものを、みんなあはせても、お砂あそびの面白味にはかなひません。げに、お砂場こそは、子どもの天國であります。

どんな家でも、苟くも子供があるお家でしたら、たとへ疊一枚のひろさでもよいですから、お砂場をこしらへておいていただきたいものです。少しの濕氣さへあれば、丸くでも、角にでもなり、山にでも、川にでも、谷にでもなり、お家にでも、お道にでも、お城にでもなる、あのお砂ぐらゐ、子供の創造力を發展させるに都合のよいものはありません。その小さい砂場は、子どものためにはひろい世界であります。彼等はその中で、時には技師になり、時には大將にな

り、時には運轉士になり、時には船頭になり、時にはお菓子屋になり、時には八百屋さんになり、成人からは想像のつかない、豐かな生活をいとなむのであります。成人の樂しみのために は、廣くもない場所に無理算段をして庭を作り、池を掘り、時には畑までも作る人たちが、子供のためにお砂場をこしらへぬといふことは、私どもにはむしろ不思議といふの外はありません。一疊敷のお砂場をつくるには、八寸幅の六分板が六枚、お砂が手車一臺、費用がたつた二圓あまりで出來るのです。氣の利いた植木鉢一つの値段にも當らないのです。何と廉いものではありませんか。あなたのお子樣に、綺麗なお帽子をかぶせるかはりに、お砂場をこしらへてあげて下さい。お帽子はいくらきれいでも、頭腦を悧巧にしません。しかし、お砂場は、子どものからだと心とを育てる樂園なのです。

この外に申上げたいことは山ほどありますが、あまり外道をしてゐると、肝腎な童話のことをお話しする頁がなくなります故、この位に止めておいて、とにかく子供を教育するには、子供の生活の中に入ることが第一の必要であるといふことを、くれ〴〵も申上げて置きます。

第四章　子供は何故お話を好むか

お砂あそびも、木のぼりも、水泳も、こどもたちのよろこぶものですが、もつと〳〵子どものすきなのはおはなしであります。お話ぐらゐ、子供によろこばれるものはありません。どんなに遊びさはいでゐる時でも、「おはなし」といふ聲をきけば、すべてを忘れてかけ集まります。クリスマスや、學藝會などに參りましても、對話だとか、唱歌だとか、劇だとか、いろ〳〵の催しがすんで、いよ〳〵お話といふ時になると、こどもの顏は、喜びと希望に溢れ、一時に緊張して參ります。

子どもはどうしてそのやうにお話をよろこぶのでせうか。

第一には、話すことそれ自體が面白いからです。

といふのは、どういふわけかといふと、人間は、本能的に、お話をしたい、お話をきゝたい

といふ欲をもつて生れたものです。此の欲があるために、自分の考へを發表することが出來、お互ひに思つてゐることを通じあひ、次第々々に人間の頭腦が發達して、今日のやうな文化が生れたのであります。人間が、お互に話をすることのない動物であつたならどうでせう。知識は發達せず、文明は進歩しますまい。それですから、お話をしたい、ききたいといふのは、子供ばかりでなく、成人も同じやうにもつてゐる欲望ですが、子供にはそれが特に強烈なのであります。この欲が一つにはおしやべりとなつて現れます、子供といふものは、目がさめてゐる間はベチヤ〳〵と話をしてゐるのであります。成人から見るとまことにうるさいほどおしやべりなものであります。もう一つにはお話をきくことにあらはれるのであります。そしてお話に非常な興味を感ずるのであります。

第二には、子どもの探奇心であります。子どもの知識は探奇心から生れます。物心ついてくると、子どもは、自分以外の外界について關心をもちはじめ、何故、どうして、どこから、といふやうな疑問をもちはじめます。泉の中から、水がわき出すやうに、子どもの心には、かういふ疑問がわき出し、年を追ふてその度合が盛んになります。それが、お話をききたいといふ欲望と結びついて來ますから、ます〳〵お話が面白くなるのであります。

第三には、子どもの想像力であります。子どもといふものは、肉體的に實に精力が盛んで、殆んど一分間の休みもなく、活動し、あばれまはつてゐるものでありますが、精神的にも、やはり同じやうに、活氣潑溂たるもので、その想像力のさかんなことは、とても成人の及ぶところではありません。その盛んな想像力を滿足せしめるために、童話がよろこばれるのであります。童話は、昔からの長い間の經驗によつて、子どもの心に適切なやうに作られてゐるお話で、この中には、子どもの考へ方に最もあてはまつてゐるやうな、いろ〳〵な空想がとり入れられてあります。それらの空想は、成人から見れば隨分馬鹿げたやうにも感ぜられるのでありますが、子供にとつては、決して馬鹿げてゐないばかりでなく、却つてこれによりて無上の滿足を與へられ、無上の喜びを與へられるのであります。

第四には子供の自己滿足であります。子供といふものは生活力の極めて旺盛なもので、隨ていやしん坊であります。そこで童話の中には、食物の話が多く出て來ます。青年男女が戀物語や戀愛詩を喜ぶやうに、子供たちは食物の話をよろこびます。手近な例をとれば、桃太郎のも

つてゐる黍團子であります。今日の子供から見れば、黍團子などは一向つまらぬもので、あまり興味をひかないかも知れませぬが。羊羹も、キャラメルもなかつた昔の子どもにとつては、黍團子といふものはよほどおいしかつたものでありませう。おまけにそれが日本一を標榜するに於てをやであります。舌切雀は糊をなめて失敗し、お爺さんは雀のお宿を訪ねて御馳走になり、猿蟹合戰は猿のいやしん坊から起ります。さういふ風に食物を材料にとつたお話は無數にありますが、ドイツの童話で有名な「ヘーンゼルとグレーテル」の中にはお菓子でこしらへた家さへあります。柱はパン、屋根はビスケット、窓は氷砂糖をはつてある、お菓子のすきな子供にとつて、こんな愉快な家がありませうか、想像にもあまる程です。

かうしたいやしん坊は、更に大きい子供になると、所有慾となり、權力慾となり、征服慾となります。子どもは社會性や道德性が發達せず、生れたまゝの姿で、極めて自己本位のものでありますから、その所有慾や、征服慾が甚だ強いであります。さうしたものが互ひに結びついて、さま〳〵な寶物の空想となつてゐます。そして、それらの空想は、だん〳〵と段階をなして發達してゐます。第一には靜的な寶物、すなはち千兩箱や、舌切雀のつゞらのやうなもので、極幼稚な寶物ですが、これが更に進歩して來ますと、打出の小槌のやうな、不思議な力をもつた器になります、千兩箱や、輕いつゞらのやうな、靜的な、一時的なものでなくて、動的な、永久的な寶物であります。一時的な富に滿足することの出來なくなつたところに、一段の進歩があります。かういふ欲望は人間社會の進歩といふ上に、もつとも必要な事で、米麥よりは、それを生み出す土の力に、財寶よりは、それを生ずる資源に目を注ぐのが人智の進歩であり、水を變へて蒸汽となし、電氣となす發明の根本も、打出の小槌を要求する慾望と共通してゐるところがあるのであります。

打出の小槌のやうに、財寶を生み出す寶物の空想は、たくさんありますが、更にそれが進んで來ますと、權力を得るための寶となつて來ます。人間は富を得るだけで滿足するものではなく、更に權力を要求するものですが、子どもにもこの事は早くあらはれ、殊に男子には、人の上に立ちたい、他を征服したいといふ慾望が痛切であります。一體童話といふものは、多くは、封建時代の、民衆の權利がさつぱり認められず、特權階級の横暴專制の下に屈服してゐた時代に生れたものでありますから、その鬱屈した民衆の不平不滿が、かういふ風な寶物の形をかり

てあらはれたものが多いのでありますが、それが子どもの征服慾にぴつたりと結び付くのであります。かうした寶物の例をあげますと、グリンムの童話の中に、ぼかんぼかんと拳骨で叩けば、叩いただけの兵士が飛びだしてくる背嚢、ぐる〳〵と頭の上でまはすといくらでも大砲の彈がとび出して來て、敵をみな殺しにしてしまふ帽子、ぶう〳〵と吹き立てると、町も城も、御殿も皆崩れてしまふ角笛などがあります。それから又、名高いアラビアンナイト中の、アラディンのランプは、すばらしい力のあるランプで、そのランプをこすりますと、中から巨人が出て來て、何でもかでも主人の命令通りのことをするのでありますが、アラディインはこのランプを利用して、無限の金銀財寶と、幾千人の奴隷とを得、貧困骨に徹するやうな自分を、此世に於ける何人も及ばぬやうな美しい貴い人となし、一夜の中に何人も見たことのないやうな大宮殿を築造したり、一瞬間の中に支那からアフリカまで宮殿を飛ばしたり、すさまじい仕事をやります。

子供といふものは、御承知の通り、きはめて功名心に富むものであります。大概の子供が、或る時期において大將となり、元帥となり、王侯貴族となることを夢想します。さういふ風な功名心は子供にとつて、極めて大切なもので、子供の時代に功名心のないやうなものは、成人となつて大成功はむつかしいのであります。さうした功名心に富む子どもたちにとつて、超自然的な能力の空想はどの位愉快なものでありませうか、彼等の心はさうした話によりてかき立てられ、喜びにあふれるのであります。

第五に、子どもが童話をよろこぶ理由としては、子どもの潜在本能をあげることができます。私どもの心の中には、現在の社會に生活をするといふには大した必要もないために、平常は隱れてゐて、しかも實は根強い力を以て心の底にひそんでゐる、さま〳〵の本能があります。このことは木のぼりのところで申上げた通りであります。子どもは小さい野蠻人でありますから、特にかうした潜在本能が露骨にあらはれ易いのですが、童話は、かういふ潜在本能の要素をたくさん含んでゐるために、特に子供に喜ばれるのであります。

皆様は子どもの時代に鬼ごつこ遊びがどのやうに面白かつたかをよく御記憶でありませう。鬼につかまへられやうとする時の恐ろしさ、それから逃げられた時の嬉しさ。成人になつてからは、あのやうに心をふるはすほどの感激は、めつたなことでは得られないものです。あの感

激はどこから來るのでせうか。それは人間の生れつきもつてゐる恐怖心をそそるからであります。大むかし人間がまだ野蠻未開の狀態にあつたころ、人間の周圍には恐ろしい敵がみちみちてゐました。猛獸だとか、毒蛇だとか、雷鳴だとか、地震だとか、噴火だとか、それらの自然界の事々物々が、怖ろしい力を以て人間を脅威してゐました。さういふ脅威の中に、辛うじて生きてゐたわれ〳〵の祖先が、ひどく臆病であり、迷信的であつたのは無理もありません。さういふ大昔から、人間の心に植ゑつけられた恐怖心は、きはめて強いので、文明の世の中になつても、心の底に潜在してゐて、それが何等かの形になつてあらはれて來るものであります、成人が怪談を喜ぶ心理もそれで、今日の世の中に、おばけや幽靈の存在を信ずるものはないにも拘らず、「四谷怪談」の芝居はいつでも大當りをとるのであります。子供が、鬼ごつこや、めくら鬼に、非常な興味を感ずるのもそのためであります。たゞの鬼ごつこよりも、めくら鬼の方が面白いのは、單純な恐怖心をそそる以外に恐ろしい鬼といふ強敵を翻弄し、その手から遁れるといふ、冒險的な興味がそれに伴つてゐるからであります。童話の中に、鬼や、惡魔や、魔法つかひや、妖女や、さまざまな怪物が出て來るのは、矢張り鬼ごつこ遊びと同じ心理的要求からでて來るのであります。さういふものを空想することによつて、子どもたちの好奇心が非常に滿足を感ずるのであります。そして、それらの强敵とたゝかひ、或は、これを翻弄し、或はこれを退治するところに、彼等の冒險心が滿たされるのであります。かういつたやうに、心の底に殘つてゐる習性は、これを適當に發露させないと、心が鬱屈して不健全になり易いので、いろいろな形でこれを發散させなければならぬのですが、童話や、遊戯はつまり、かういふ潜在本能のために、安全瓣の役をつとめるのであります。これは童話が子どもに喜ばれる理由の一つとして、大きなものであります。

第六に、子どもが童話をよろこぶのは、その正義感が滿足されるからであります。童話の内容になつてゐる空想的産物は、子供の心に大きなよろこびをもたらすものでありますが、それと同時に、童話が子供をよろこばせる大きな力は、その精神において、正義があるからであります。惡を憎み、善を愛する心、暴虐なるものを憎み、正しきものを愛する心、それが童話においてはもつともよくあらはれてゐます。子どもの道德的感情は極めて鮮明であり、その批判は明快であつて、成人のやうに迂餘曲折したところがありません。尤も子どもの頭腦を以て解

し得るだけの、簡單な問題に限るのでありますが、子どもは實に明快にそれらの問題を批判し、且つその實行を要求するのであります。さういふ傾向が、彼等をして童話を此上なく喜ばしめるのであります。現實の世界は、神の世界ではありません。純眞無垢な子どもの心は、現實の世界を見ることによりて滿足せられません。そこに童話の世界を要求されるのであります。童話の世界こそは眞に神の世界であるからであります。子どもの道德的感情の滿足、これまた童話の子どもを喜ばす大きな力であるといはなければなりません。

このやうに、童話が子どもによろこばれるのは、單純な理由からではなく、實に複雜に、いろ〳〵な方面に於て、子供の心と本質的な交渉をもつてゐるからであります。これによつて、童話といふものが、いかに子供の教養の上に大切なものであるかといふことが、ほゞお分りになりましたことと存じます。

第五章　お母様のお話にはおつぱいの味がある

今日の若いお母様がたの中には童話といへば、童話の專門の先生が、何百人、何千人といふ子供を前にして、大きな聲をして、大きな身振り、手振りをして、お話をする、ああいつた話ばかりと思ひ、童話といふものはなかなか難しいものだと思つていらつしやるお方があるかも知れません。けれどもそれは考へ違ひで、ああいふ童話は、澤山の子供を相手にして、大會場でお話をするために、仕方なしに遣る、いはば變態的なお話の仕方なのであります。

それならば、その變態的でない、童話のそも〳〵の本然の姿は何でありませうか。

それは家庭のおはなしであります。

むかし昔、まだ世界が今日のやうにひらけなかつた時分、芝居や、活動といつたやうなものもなく、夜會や、ダンスホールや、カフエーといつたやうなものもなかつた頃、家庭は、すべ

ての人にとつて、何より樂しい慰安の場所でありました。すべての家族が、夜になれば家にあつまつて、赤くもえる爐の火をかこみながら、休息の時を樂しんだのであります。さうして、その爐邊の興を添へたのは、何よりも、お爺さんお婆さんたちの口から語られる「むかし〳〵あつたとさ」のお話でありました。子どもたちは、あるひは爐の火をいぢりながら、あるひはお母様やお姉様の膝にもたれながら、あくことなき好奇心を瞳にかゞやかして、お婆さんの口もとを見まもり、そのお話に聞きとれたのです。かういふお話いはゆる爐邊譚 Fireside Story こそは、童話の本當の姿なのであります。

ところが話といふものは人によつて上手下手があるものですから、一つの村でも特別にお話の上手な、そしてよくお話を記憶してゐるやうな人の話が、よろこんできかれるやうになり、爐邊の話が、更に村の話となつて、すゞしい木かげや、あたゝかい日向のひまつぶしに、村の子どもたちが、さういふ人のまはりに集まつてお話をきくやうになりました。それが專門的な話術家のはじめで、日本ではかういふ人たちを「語部」といつてをります。ヨーロッパでは、昔は方々の國々を遍歷して見たり聞いたりしたことを物語歌に作り、それを演奏して、王宮や、富豪の家などを泊りあるいた、さすらひの詩人が多くありました。それらの人々はスカルド (Skald) とか、インプロヴィザトーレ (Improvisatore) とか、其外さま〳〵な名で呼ばれ、隨分歡迎をうけたものです。日本でも琵琶法師といふものがあつて、平家物語などを琵琶にあはせて語りながら、國々を遍歷してあるきました。かういふ人々は、即ち前にのべた「村のお話上手」が一層發達したもので、今日の講談師や落語家などはその一層進んだものであります。しかし、遍歷詩人や、琵琶法師や講談師や落語家は、主として成人を相手にするもので、子どもを相手にしての話は、依然として「村のお話上手」に委ねられたのでありますが、兒童教育の發達にしたがひ、童話の形が次第に複雜になり、特にお話を職業とする人が出來てきました。即ち學校教育の盛んになるにつれ、爐邊のお話は、次第に教室のお話になり、更にこども會や、童話會といふやうな會合の盛んに行はれるにつれて、一層大衆向きな、大會場童話といふやうなものに變つて來ました。

さういふ大規模な童話は、社會の必要によつて生れたもので、それもなくてはならぬものです。しかし、そのために、昔からの家庭のおはなしを、滅ぼしてしまつてよいかといふと、そ

れは斷然反對しなければなりません。學校のお話、大會場のお話、どれも結構ですが、家庭のお話だけは依然としてそれ以上に必要であります。

しかし、一方から考へれば、今の世の中は忙しい世の中です。成人は晝間の過勞のために、疲れ切つてヘトヘトです。それだのに、夜は夜で、社交界のつとめも果さねばならず、町の會にも出なければならず、お客の相手もしなければならず、お話どころではありません。お母様の仕事も隨分多い、お姉様は夜學だ、お稽古だと忙しい。子どもにお話をしてゐるひまはありません。まあまあ、お話はラヂオに任せておいて……といふのが懸値のないところ、今日の中流家庭の實情です。

これはまことに悲しい現實です。しかし、このまゝにしておいたならば、日本の子どもたちは、みなさまのお子様方は、どうなりませうか。家庭の溫い情味に育まれない子供の將來はどうでありませうか。乳母と、家庭教師と、ラヂオと、學校の先生に子供をまかせ切りにしておくお母様は、本當のお母様といふことが出來ませうか。私はこのことを深く考へたいと思ひます。

しかし又、一方からは、お話なんてさう誰にでもできるものではない。ちやんとお話の專門家があつて、ラヂオなり何なりで、あきもせずにお話を話して下さるのだから、私たちが下手なお話をする必要はない、と仰る方もありませう。なるほど、それも一理屈です。しかし、そこが肝腎なところです。お話といふものは、誰でも上手に出來るとは限りませんが、下手でもよければ誰にでも出來るのです。ところが、お母様の口からきくお話は、たとへどんなに下手でもおつばいの味があるのですが、えらい先生のお話は、どんなに上手でも、牛乳の味しかないのです。なぜかといふと、お話の生命は愛であるからです。

お母様におツばいのない場合には仕方がない。人工榮養で育てなさい。然し、おツばいが澤山おありでしたら、ぜひお母様のおツばいでお育てなさいませ。それと同じやうに、お母様のお口から、ぜひ時々はお子様にお話を聞かしてお上げなさいませ。お母様のお口からお話をきくことの出來るお子さんは幸福であります。殊に、お母様が、絶對的な力を以て支配していらつしやる赤ちやんたちに對しては、お母様以外のものには、お話をする力がないのであります。

このことは私一人の考へではありません。坪内逍遙先生も、このことをある書物の中で力說

しておいでになります。次に先生の御說を拜借して、助太刀をしていただきませう。

「學校と家庭とでは、又、少數者へ話すのと多數者へ話すのでは、內容はともかくも、話し方の上には大分の差があつて當然だと思ふのだが、さういふ研究の發表はまだないやうである。見落しかも知れないが、岸邊、下位兩君のにも、それはなかつたやうである。私は、此家庭方面の話術が、將來はむしろ必要ではなからうかと思ふ。家々の父、母、姉たる人の餘暇は、專ら此種の慈愛的奉仕に獻げらるべきものだと思ふと、特に之がために、特殊の童話術を研究して貰ひたい。岸邊君や下位君のは、立派な藝術だと、聽かないながら信じて居るが、どちらかといへば——勿論、善い意味の——プロフェッショナルである。私は、それとは別に、家庭的な、高等お伽話術といふやうなものを盛にして貰ひたい。すなはち無論藝術的ではあるのだが、又、あくまでも誠實、あくまでも眞劍ではあるのだが、技藝家たるよりもむしろ父母たり祖父母たる心持を第一と立てて、極親しく、極寬ろいで、たとひ話し損つて子供に笑はれやうと、一時威嚴を失はうと、そんな事には頓着しないで、又、頓着する必要のないやうな關係で話す童話術の新研究がして貰ひたい。いはゞ、話術者みづからが、あまり自意識的にならないで、極く寬いで、自身も心から樂しんで、よしんば敎訓の底意があるにしても、注入的、賦課的でなく、浸潤的、感孚的、一言でいへば、藝術的にと心掛けて話す仕方を研究をして貰ひたい。それには、服裝や姿勢や態度等の研究は必要でない。又假聲や身振りも、半無意識に自然に發するもの以外を要しない。但し話の氣分、空氣、心持を發揮するためには多少の用意、とりわけ目口の表情には力瘤を入れて貰ひたい。けれども豫め身振の段取を一々に工夫するやうなことをしないでもよい。むしろしないはうがよい。碎いていへば、彼の炬燵にあたつて「桃太郎」や「かちかち山」を話した大祖母さんの天保式を二十世紀式に醇化せしめたにすぎないもの丶方がよい。もつとも、話の內容は選擇せねばならず、無駄は思ひ切つても切り捨てねばならず、用語もいろ〳〵に取捨せねばならず、就中、發音の明瞭、聲の高低、抑揚、緩急の工夫はせねばならぬ。

明白にいふと、私は此家庭童話術の日を迫つて、廣く全國に行はれるやうになればよいと願つてゐる。公會席上の童話術もたしかに一つの大切な文化力であるが、應病與藥と

か、見人說法とかいふ意味の效果からいふと、家庭童話術こそ最も適切なものであらう。慈愛といふ大きな後光が話術者の背後に輝いて居り、自然の睦みとか敬愛とかいふ空氣が聽く者の周圍に彌漫してゐる上に、其聽者の稟賦なり、善惡の性癖なり、其平生の嗜好、傾向、其他一切の事が話し手に知り盡されてゐるのが其强味である。」

第六章　家庭でお話の仕方

一、年齡によつてお話の要求がちがふこと

先づ第一に考へたいことは、子供は、生き、成長し、發育し、變化しつつあるといふことであります。子供といつても、嬰兒と三歲兒とは違ひ、三歲兒と七歲兒とは違ひ、嚴密にいへば、昨日の子供と今日の子供とは違ふのであります。成人といへども、變化せぬわけではありませぬ、が、子供の變化は成人の變化に比べて、はるかに急激であります。なぜかといふと、子供はその發達の期間に、原人から文明人までの幾萬年の過程を再現するからであります。人間といふものは、實に靈妙に出來たもので、十個月の間、胎內で生活してゐる間に、アミーバから人間までの歷史を再現するのですが、更に母胎を離れて後は、原人から、高等な文化をもつ、文明人にまで發展變化するのであります。

それでありますから、子供に與へるお話は、この發達の狀態如何を考へて、變へてゆかねばならぬわけであります。童話でさへあれば、何でもよいといふわけのものではありませぬ。嬰兒に與へるお話と幼兒に與へるお話とは違ひ、幼兒に與へるお話と、高學年の子供に與へるお話とは違はなければならぬのであります。ある學者は、童話の立場から、兒童期を次のやうに分けました。

一、韻律期
二、想像期
三、勇力期
四、傳奇期

韻律期といふのは、非常にリズミカルなことを喜ぶ時代で、年齢でいへば二歳から五六歳まで。想像期といふのは、想像力が非常に旺盛になり、空想や、探奇性が發達してくる時期で、五六歳から七八歳まで。勇力期といふのは、勇ましいことを喜び、英雄崇拜が盛んになる時期で、八九歳から十二歳位まで。傳奇期といふのは、感情の働きが濃やかになり、ロマンチツクなものを喜ぶ時で、十三四歳から十八九歳までをいふのであります。そこで、お話は、これらの時期に相應するやうに、適當なものを選んで與へられなければならぬのであります。その中で、本書の中で取扱ひますのは主として、韻律期と想像期に屬する事柄であります。

そこで、かういふ風な、時期に應じて、何のやうなお話を與へるがよいかといひますと、第一の韻律期の子供は、まだ想像力が發達せず、頭腦が極く幼稚で、ただ韻律を愛する傾向だけが著るしく發達して居り、丁度野蠻人と同じやうであります。それでありますから、この時代の子供には、日常目に見馴れてゐる材料をとりあつかつた、極めて簡單な形のお話で、反復のあるものがよいのであります。この時代の子ども は特に動物ずきでありますから、動物を材料としたお話、桃太郎とか、猿蟹合戰とか、舌切雀とか、花咲爺とか、かちかち山とかいふやうな話を喜ぶのであります。この時代の子どもには又、大して意味のない、ナンセンス話が適當してをります。それは、この時代の子供は、頭腦が幼稚で、物を理屈だてて考へたり、筋を構成したりする力がないからであります。詳しいことは、次に述べます。

想像期に入つて參りますと、子供の想像力は急速に發達して來ます。此の時代の子供は、肉

體的にも非常に活動的で、あたかも草木の芽生えのやうな、盛んな力をもつて活動しますが、その心理的活動も、目覺しい力をもつて現はれてきます。即ち、探奇心が盛んになつて、事毎に、何故？　何うして？　何處からといふやうな質問を提起し、また想像力が盛んになつて、成人には考へもつかぬやうな突飛な空想をほしいままにするのであります。それゆゑ此の時代の子供には、お伽ばなしが一番喜ばれるのであります。

英雄期になりますと、子供は次第に個性が發達し、自己意識が旺盛になると共に、征服慾が盛んになり、優越感を喜ぶやうになつて來ます。それ故、英雄崇拜的傾向が盛んになり、英雄譚を喜び、自分がお話の主人公になつたつもりで、その愉快な空想にひたるのであります。大膽な青年が巨人を征服した話であるとか、人身御供の美姫を助けて惡神を退治する話であるとか、さまざまの異能を發揮して强敵と戰ふ話であるとか、左樣した權力、武力、體力を中心としたお話を喜ぶのであります。さうして、一方には又、道德性が發達し、社會正義の觀念が生れて來ますから、一方には英雄崇拜心、一方には正義の觀念と、この二つのものが結び付いて、更に高尚な、精神的なヒロイズムへと移つて行くのであります。

十二三歳になりますと、子どもは漸く性の目ざめに近づいて來ます。その前徵としてはこれまでの殺伐な氣持が衰へて、一般に感傷的になり、女子は殊に感情が鋭くなります。さうして勇力の讃仰が、一層高尚な英雄主義や理想主義に變つてゆくのであります。此の時代から十八九歳までは人間の一生の運命を形づくるといつてもよいほど大切な時代でありますから、讀物には最も注意を拂はなければならないのであります。次に幼兒期を主として、家庭でのお話に必要な注意を申上げませう。

二、幼兒の話は形が不完全でも差支ない

子供がどういふお話を好むか、といふことは、最も重大な問題であります。前に述べたやうに年齢によつて、お話に對する好みも違つてくるのですが、くれぐれも申したいことは、成人の面白がる話、必ずしも子供が喜ばないといふことであります。その反對に、成人にとつては何の面白味もない話を、子供が非常に喜ぶ場合もあるのであります。成人が考へて、藝術的に立派な構造をもつてをり、思想的に深味をもつてをり、すぐれた童話であつても、子供が少し

もこれに興味を持たないならば、それは童話として落第であるといふの外はありません。その反對に、成人から見て、愚にもつかない、取りとめもない話であつても、子供の心を、その發育の程度において、養ひ、溫め、强めるものであるならば、其の教育的價値は絶對であるといはなければなりません。

赤ン坊から幼兒へ移り變つてゆく、三四歳位の子供は、人間として全くの芽生えである如く、そのお話もまとまつた童話といふやうなものでなくして、ほんの、童話の芽生えであつてよいのです。この時代の子供に話すお話は、藝術的に見て、全く不完全な構成のものでもよいのです。筋といふほどの筋のないものでもかまひません。何か筋がなくては、落ちがなくては、結末がつかなくては話にならないと考へるのは成人の考へであります。

假令へば「桃太郎」のお話をなさるでせう。桃から生れた桃太郎が、大きくなつて力もちになつて、鬼ケ島征伐にゆく、犬が出て來て、猿が出て來て、雉が出て來て、家來になる。たうとう鬼が島へ行つて、鬼を征伐して、寶物を分捕つて歸つて來るところまでお話をしなければ滿足できないのは、成人本位の考へ方です。小さい子供にとつては、桃の中から赤ちやんが飛びだしただけでも、それで立派なお話として、面白くうけ入れられるのです。

お母様は、ただ子供の興味に應じて、子供がうけ入れられるだけのお話をしてゆけばよろしい。ゆめゆめ、成人の興味を中心として、子供にお話を强制してはなりません。どうもお話の種がなくて困るとおつしやるお母様方があります。さういふお方は、子供に、立派な、藝術的な、豐かな教訓を含んだお話をしようと心がけてをられるのですが、子供は案外もつと平凡なお話を喜ぶのであります。

『むかしあるところに、お母様と、坊やとありましたよ。ある時お母様がね、坊や、今日は動物園へゆきませうか、……え、お母様、動物園へゆきませう、うれしいなうれしいな……それから二人で、動物園へゆきましたよ。電車にのつてね。チンチン動きます……ゴウゴウ、ガツタンガツタン、小川町、須田町……さうするとね。向うから消防自働車が來ましたよ、ビユーツ、ビユーツつてね、それ火事だ、火事だ、チンチン、ゴウ、ガツタンガツタン、チンチンゴウ、ガツタンガツタン、……上野廣小路……公園前、さあ、坊や、下りませうね、坊やとお母様と、電車を下りて動物園にゆきましたよ。さうするとね、象

さんが、坊ちやん、いらつしやいませ、といつて、大きな鼻を、ニユウツとつきだしましたよ。』

こんな他愛のない話が、時としては、童話作家大先生の傑作よりも、はるかにはるかに子供の心を動かすのです。本當に子供の心を知つてゐるお母様なら觸目皆花、毎日の生活の中からいくらでもお話が出てくる筈であります。

それについて面白いお話があります。私の懇意はなさんの家で、奥様が、お女中を相手に、朝御飯の仕度をしていらつしやいますと、Tさんが、百合子ちやんといふ三つのお嬢様と、蒲團にくるまつて、お話をしていらつしやいます。そのお話をきいて、奥様も女中さんも吹き出してしまひました。それは、かういふお話なのです。

『お父さんねる、
朝起きる
百合子新聞もつてくる、
お父さん新聞よむ。』

たゞそれだけの話を、いくども〳〵繰り返してゐるのですから、滑稽千萬です。いまに百合子が怒りだすだらうと、奥様とお女中さんは、クス〳〵クス〳〵やつてゐますが、百合子さんは夢中でこの話をきいてゐる。お父さんが止めると、もつとやれ〳〵とせがむ。

さあ、それからといふもの、『お父さんがお話をしてあげよう』と仰しやると、百合子さんから、きつと、『お父さんねる』をやれといふ註文です。

それでお母様深く考へさせられました。このお母様は童話作家なのですが、童話の秘訣といふやうなことについて、新らしくお考へになつたといふことです。

この頃の子供は、よく、ひとりでお話をするものであります。注意ぶかいお母様は、子供のひとり話を聞逃さぬものです。子供がただ一人で、お室の中で、お人形さんや繪本を相手にして、お話をしてゐます。ペチヤクチヤペチヤクチヤと何かしやべつてゐる、そのお話は、實に出たらめで、何のことやらさつぱり譯が分らぬのですが、それを話してゐる子供自身には、十分にわけが分つてゐるのです。それは子供の幼い考へ方を、幼い言葉によつて、出來るだけの

力を以て表現してゐるので、子供自身にとつては立派なお話なのであります。

三、擬聲の大切なこと

ある女の先生が、子供に言葉を正確に教へなければいけない、赤ン坊のための特別な言葉、假令ばワンワンとかニヤアニヤアとかいふやうな言葉をつかはずに、初めから犬、猫といふやうに正しい國語を教へるがよろしい、さうすれば言葉を二重に教へずに濟む、かういふ無駄な手數をかけるから、國語教育が進歩しないのだ、といふやうなことを或る所で述べて居られました。かういふお方は、前に述べたやうに、子供といふものが、絶えず變化し、發達しつつあるものだといふことをお考へにならないのであります。

赤ン坊に赤ン坊の言葉があるのは、心理的必然が生むのであります。それを無理に成人の言葉を使はせようといふのは、赤ン坊に成人の食物を食べさせようといふに同じい亂暴であります。かういふ誤つた考へ方をもつた人、寧ろ子供といふものを本質的に知らない人に、子供を教育されることは甚だ困つたことであります。

吾々の複雜な言葉は、吾々の複雜な頭腦の働があつて始めて生れるのであります。文明が進めば進むほど、言語は複雜になるのであります。原人の言葉はどのやうなものであつたか、今日の吾々には想像もつかぬのでありますが、恐らくは吾々の嬰兒の言葉と同じ程度の單純なものであつたでありませう。

嬰兒の言葉、そして又、未開民族の言葉に、特有なのは擬聲であります。野蠻人の詩歌には、非常に擬聲が多くありますが、赤ン坊の言葉は、まづ第一に、擬聲によつてあらはされるのであります。人間が最初におぼえる言葉は大抵擬聲によつて出來てゐます。ニヤアニヤア、ワンワン、カアカア、チユウチユウなどは其の例であります。最初の文字は、物の形にかたどつた象形文字でありますが、最初の言葉は、物の音をまねた、擬聲なのであります。かういふ單純な言葉は、成人の、而も文明人の言葉の中にもいくらか殘つて居ります。例へば大砲のことをガンといふのもさうです。日本では午砲のことをドンといひます。吃逆をシヤツクリといひ、憤嚏をハクションといひ、うがひをガーグルといふなども擬聲の例であります。

それでありますから、ある時期の幼兒にとつて、擬聲といふものが非常に大切なのです。ワ

ンワンとか、ニヤアニヤアとかいふ不完全な名詞を、成人が教へるのではなくして、子供の頭腦の必然的要求に應じて、かういふ言葉が生れたのであります。

幼兒のお話において擬聲が大切であることは、想像以上であります。

『むかし、あるところに、お爺さんとお婆さんとがありました。お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へお洗濯にゆきました。お婆さんが川でお洗濯をしてゐますと、大きな桃が流れてきました。まあ、大きな桃だ、とお婆さんは喜んで、その桃を拾つて、お家へもつてゆきました。お爺さんお爺さん、いいものをあげませう。ははあ、これは大へん大きな桃だ、どれどれたべませうと、庖刀をだして切らうとしますと、不思議や桃がひとりでにわれて、中から大きな赤ちやんが飛びだしました。』

といふ話でも、子供は納得しないことはありません。けれども次のやうな話方ならば子供の興味は數倍するのであります。

『むかしむかし、あるところにお爺さんとお婆さんとがありました。お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へお洗濯にゆきました。お婆さんが、川のふちにしがやんで、ジヤジヤブジヤブジヤブ、ジヤジヤブジヤブジヤブとお洗濯してゐますとね、向うから大きな桃が、ドンブラコツコスツコツコ、ドンブラコツコスツコツコと流れて來ました。まあ、大きな桃だとお婆さんはその桃をひろつて、お家へもつて行きました。お爺さんお爺さん、いいものをあげませう、ははあ、これは大へん大きな桃だ、どれどれたべませうと庖丁を出して切らうとしますと、不思議や桃がパツクリとわれて、中から、可愛らしい赤ちやんが、オギヤアオギヤアオギヤア、オギヤアオギヤアと、とびだしました。』

四、韻律が大切なこと

附　歌と舞踊のこと

次に申上げたいのは韻律のことであります。

一體韻律を好むのは人間の通有性です。いや、人間の、といふよりは、むしろ萬有のといふ方が適切であるかも知れません。『花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるもの、

いづれか歌をよまざりける』と紀貫之はいつてゐますが、鶯や蛙が歌をよむばかりでなく、今日の人間の目で見れば、太陽や月も歌をうたつてゐるといつてよいかも知れません。むしろリズムそのものは、宇宙の本質に關係があるのではないかと考へられるほどです。月の運行も、太陽の歩みもリズムです。ひろい宇宙の動きすべてリズムです。月の移るのも、年のくりかへすのもリズムです。

このやうに、あらゆるものに深く存在してゐるリズムが、人間にはどういふ風になつてあらはれるかといふと、言葉と關係しては歌になつてあらはれます。さうして、身體と關係しては舞踊になつてあらはれるのです。

かうして韻律愛好性は、生れて八九ケ月位になりますと、發育の早い子なら、もうはつきりと現はれて來ます。蓄音機や、ラヂオの音樂をきいて、手や、足を動かし、チンドン屋の音樂をきいて頭をふり動かして、極めて幼稚な舞踊をやるのです。三歳位になると、彼等はもう、あらゆる音樂にあはせて、律動的に身體を動かし、早いところは早いやうに、遲いところは遲いやうに、實に自然に、巧まざる舞踊をいたします。言葉に現はれるリズムと、動作に現はれるリズムが、幼兒に於ては不可分なものであります。

幼兒の生活に於て、リズムが重大な役目をつとめることは、想像以上であります。ねんねんころりよ、おころりよのリズムにあはせて、子守たちは、自然に身體をゆりうごかし、背の子どもにダンスと同樣の快感を味はせるのであります。お母樣のやはらかい手が、子どもをねせつけながら、靜かに同じ調子を繰りかへして、お蒲團の上にさはる時、子どもはその肉體に微妙なリズムを感ずるのであります。

さういふ意味で、お母樣は、よき歌ひ手であつてほしいと思ふ。勿論、それは聲樂家であれといふ意味ではなく、咽喉自慢の歌を、所きらはず、歌つて下さいといふわけではない。さういふ意味でなしに、家庭において、愛兒を相手としてのよき歌ひ手であつてほしいと思ふのです。お母樣の歌ほど、子供にとつて、快い韻律的感動を與へるものはないに違ひないのです。さうして、いつでも子供の要求する歌を、思ふまま引き出せるほどいろいろな種類の歌を、知つてゐてほしいと思ひます。

子供は一般に歌が好きですが、殊に女の子は男の子よりも、より多く歌を好むやうです。女

の子にお話をするのには、どうしても歌をつかはなければなりません。歌とお話を等分位にしてもよい程であります。

『おや〳〵桃の中から大きな赤ちやんがとび出しましたよ。これはこれは立派な赤ちやんだ。桃の中から生れたから桃太郎とつけませう……それからお婆さんがね、おいしいおつぱいをたくさんあげましたよ。それからパンもあげましたよ。ミルクもあげましたよ。お林檎もあげましたよ。』

あかい、りんご
ミルクとパンと
おいしくたべて
大きくなるよ

さあ、桃太郎さんが大きくなりましたよ。力もつよくなりましたよ、ある時のこと桃太郎さんがね、お爺さんお婆さん、僕、鬼ヶ島へ鬼征伐にゆくのですから、お辨當をこしらへて下さい……。』

この『あかいりんご』といふ歌は、津川主一氏の『日曜學校幼稚園聖歌集』の中にあるのですが、この歌を歌ふと、歌はないとによつて、子供のよろこび方に、非常な違ひがあります。もう一つ例をあげます。

『舌切雀、お宿はどこだ。舌切雀、お宿はどこだ。……お爺さんが、雀さんのお家をさがして行きますとね、向うのお山の麓の、竹やぶの中で、チユンチユクチユウチユウ、チユンチユクチウチウ、チユンチユクチウチウと雀さんがないてゐましたよ。やれやれ、あそこに雀さんのお家があるよ、舌切雀お宿はどこだ、……お爺さんお爺さん、こちらでございます、よくいらつしやいました。おおおお雀さんや、よう無事でゐてくれたね、……さあさあ、お爺さん、どうぞお通り下さいませ。御馳走をしてあげませう。雀さんがね、たくさんおいしいものをもつて來て上げましたよ。パンだの……キヤラメルだの……お林檎だの……、おすしだの……チョコレートだの、澤山もつて來ましたよ。ああおいしい、ああおいしいといつてお爺さんが、たくさん御馳走をたべました。さあさあ、お爺さん、みんなで雀をどりをお

目にかけませう。雀さんたちがね、赤いおべべをきて、歌をうたつて、踊りましたよ。

雀、雀、今日もまた
くらい道をただひとり
林の奥の竹やぶの
さびしいおうちへかへるのか
いいえ、皆さん、あそこには
父様母様まつてゐて
たのしいお家がありまする
さよなら皆さん、チユツチユツチユツ。

小さい女の子は、雀といつしよに、手をふり、足をふつて踊りだします。

さて、ちと話が、横道に外れますが、歌と踊りのことが出ましたから、子どもの歌と踊りについて、ちよつと愚見を申述べたいのです。先程、お母様は、よい歌ひ手であつてほしいといふことを申上げましたが、それについておねがひしたいことは、お母様がお子様たちのためによい音樂の先生であつてほしい。といふのは、お母様の歌が、音樂的正確であつてほしいといふことです。お母様の歌は、ステージに立つて歌ふ聲樂家のやうにいみじきふるへ聲でなくてもよろしく、またすばらしく上手な表情にアンコールをよぶ必要もありませんが、ただ音程が正確であつてほしい。音程の不正をいふことは歌をうたふ上に於て一ばんの缺點で、一度間違つた歌ひ方を教へられると、子供はなか〳〵直らないものです。同じ意味で、レコードの選擇にも、かなりの注意が必要でありませう。數あるレコードの中には、どうかすると其點に於てあまり感心の出來ないものもないではないのであります。

子供に歌を教へる上に於て、第一に必要なことは、音を正しく聞き取らせることです。すなはち耳の練習であります。耳で聞き取ることが正しくなければ、決して口で正しく歌ふことは出來ないものであります。しかし音を正しく聞き取らせるためには、お母様自身の音が正しくなければなりません。そんな八釜しいことをいはれては、うつかり歌もうたへない、そんな面倒なことなら、子供に歌を歌つてやることは御免だ、などとおつしやるお母様があるかも知れませんが、別に六ケしいことはないので、小學校で教へるドレミファが正しく出來さへすればよ

いのです。なんでもない話なのですが、そのなんでもないドレミファを案外よい加減にしてゐる人の多い證據には、永井郁子も、立松房子も、四家文子も其處退けといつたやうな、上手な歌ひぶりや表情で、肝腎な音程がしつかりしてないといふやうなお母様や、お姉様が、どうかするとあるのです。自分の子に眞直にあるけといつた母蟹のやうでは困りますから、なんでもない、平凡なドレミファを、しつかりやつておいていただきたいものです。

次には踊りのことであります。

踊りには、歌詞によつて踊るのと、曲によつて踊るのと、二た通りあります。此の中、いづれが、より多く本質的なものであるかといへば、勿論後者であります。幼兒には言葉といふものがなく、たゞ音だけが分るのでありますが、それでも、その音の高低緩急强弱にあはせて、律動的にからだを動かします。また野蠻人の舞踊には、言葉は少なくて、笛や太鼓の調子によつて踊るものが多いのであります。頭腦の發達につれて、言葉が複雜となり、それが舞踊の中に取り入れられて來るのであります。大體に於て、西洋の舞踊は、曲を本位としたものが多く、日本の舞踊はどちらかといへば歌に重きを置きすぎたものが多いのでありますが、近來は、日本舞踊でも、次第に音樂を重視するやうになつて居り、曲と言葉とが舞踊に於て融合統一されるやうになつたのはよろこばしいことであります。

幼兒の舞踊では、その心的發達の程度から考へても、曲を本位とすべきことは當然であります。勿論、言葉の意味を表現することは差支なく、曲と並行してゆきさへすればよいのでありますが、どうかすると、少しも音樂的素養のない素人が、全然音樂的要件を無視した振付をしてゐるやうなものがありますから、舞踊の教師を選ぶには注意が肝要であります。「お手手つないで」で手をつなぎ、「靴が鳴る」で飛び上るといふやうな振付は、おさんどんにでも出來るので、あへて振付の先生を煩はすには及ばぬのであります。眞の舞踊は、幼兒の心と身體とを渾一體として韻律化するにあります。

つぎにお子様方に舞踊をお教へになる方に御注意いたしたいのは、それがどこまでもお子様本位であつてほしいことです。子どもの踊りは、どこまでも「自分が踊る」べきものであつて、「踊つて見せる」べきものではありません。踊つて見せるのが惡いことではないが、それは副產物で、自分自身が踊るといふことを目的としなければなりません。踊ることそれ自身に、子ど

もは無上の喜びをもつのでありますから、それ以外のことを期待さすべきではないのです。勿論、子供の方からいつても、多勢の人に、自分の出來榮えを見て貰ふことは惡い氣持ではないに相違ないのですが、それよりも、自ら踊ることに於て、彼等自身の生命の躍動があるのであります。さらに一層願はしいことは、子供に踊らせるばかりでなく、お母様や、お姉様が、子供と一しよになつて踊つておあげになることです。

楽しい晩餐後の芝生の上で、お母様や、お姉様が、小さいお子さんの手をとつて、共に踊りをなさる時、お子さんたちのよろこびはどんなでありませう。美しい晴着をきてステージの上に立つよろこびよりは、はるかにこの方がまさつてゐるだらうと思ひます。

西洋人はダンスが好きです。何ぞといふと踊ることばかり考へ、どうかすると徹夜して踊つてゐる。私は西洋人の眞似をしたくはありませぬ。しかし、子供を中心とした家庭の舞踊といふやうなものは、どこの國にもあつてほしいと思ひます。それは子どもの心身を引きのばす强い力となるばかりでなく又それによつて成人も童心にかへり健康の上にもよろしいからです。

五、くりかへしが必要なこと

次に申上げたいことは、子供が大へん繰りかへしを好むことであります。これはお話をなさつてをれば、自然に分ることでありますが、子供はふしぎに、同じことを、幾度もくり返して話すことを好むものであります。そこで、昔からのすぐれた童話には、必ずこの繰返しがあります。『桃太郎』にしてもさうです。犬と、猿と雉とが、かはるがはる出て來て、全く同じことを繰返すのです。

『向うのお山の中からワンワンワン、ウーワンワン、と犬が一匹出て來ましたよ。桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへいらつしやいます。僕は鬼ヶ島へ鬼征伐にゆくのだ。お腰のものは何ですか、これは日本一のきび團子だ。一つ下さいお伴しませう。よしよし、一つやるぞ。桃太郎さんが、お腰の嚢から黍團子を一つ出してやりますと、犬がああおいしい、ああおいしい、パクパクパクとたべてしまひました。さうして桃太郎さんのあとについてきましたよ。

さうすると今度はね、向うのお山の中から、キヤツキヤツキヤツ、キヤツキヤツキヤツと お猿さんが出て來ましたよ。桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへいらつしやいます。僕は鬼ヶ島へ鬼征伐にゆくのだ。お腰のものは何ですか。これは日本一の黍團子だ、一つ下さいお伴しませう。よしよし、一つやるよ。桃太郎さんがお腰の嚢から、黍團子を一つ出してやりますとね、猿が、ああおいしい、ああおいしい、パクパクパクとたべてしまひました。さうして桃太郎さんのあとについてゆきましたよ。

さうすると今度はね、向うのお山から、ケンケンケンケンケン、ケンケンケンケン、雉さんがとびだして來ましたよ。桃太郎さん、桃太郎さんどちらへいらつしやいます。僕は鬼ヶ島へ鬼征伐にゆくのだ。お腰のものは何ですか。これは日本一の黍團子だ、一つ下さいお伴しませう。よしよし一つあげませう、桃太郎さんが、嚢の中から、黍團子を一つ出してやりますとね、雉が、ああおいしい、ああおいしい、パクパクパクとたべてしまひました。さうして桃太郎さんのあとをついてゆきました。」

かうした繰返しは、恐らく、どんな成人にとつても、退屈千萬なことであるに違ひありません。しかし子供にお話をして見ると、この繰返しが、どうしても絶對的に必要であるといふことが分ります。成人の考へ方からすれば、かういふ話は、初めの犬の話だけをくはしく話しておいて、あとは「お猿さんも黍團子をもらつて家來になりました、雉も貰つて家來になりました」と片付けてしまへばよいのですが、さて、實際に子供に話をすることになると、この繰返しといふことが、非常に大切なものであるといふことが分ります。

子どもが、このやうに繰返しを好むのは、記憶力の發達の道程にある彼等が、同じ話の再現によつて、その記憶力を働かすことに大きな滿足を感ずる爲であるのですが、もつと根本的な理由は、やはりこの韻律愛好性にかかはるので、話が韻律的に構成されることに非常な滿足を感ずるのであります。何れにしても成人にとつては退屈千萬なこの繰返しが、子供にとつては殆んど絶對的ともいつてよいほど必要であるといふことは、お母様にぜひ知つていただきたいことであります。西洋のお話の中には、全篇ほとんど、このくりかへしから成つてゐるお話さへあります。

六、お話の途中で問答をすること

小さい子供とお話をするのには、擬聲が必要なこと、歌が必要なこと、繰返しが必要なことは、以上述べたところでお分りのことと存じますが、も一つ大切なことは問答といふことであります。

小さい子供とお話をするのには、時として問答が入つて來るのであります。これは、しひてこちらから發問しなくてもよいのですが、子供の方から問ひを發して來ますから、それに答へながら、適當に話を進めてゆくのであります。子供は非常に活動的なものでありますから、なかなか默つてお話を聞いてゐるといふことはなく、必ず何か口を出すのですが、子供の問ひに答へずに、そのまま話を進めてはなりません。それは折角發芽した、子どもの智力を挫折させてしまふことになるからです。假令ひ、どんなつまらない問でも、聽きすてずに答へてやらなければなりません。例へば

「お婆さんがね、おいしいおいしいおつぱいをたくさんあげましたよ。それからパンもあげましたよ。お林檎もあげましたよ。」

と話してゆくと、小さな子は、きつと

「私も、私も。」

「僕も、僕も。」

といふのです。その時には

「さうさう、太郎さんにもあげましたよ、花子さんにもあげましたよ、それで皆大きくなりました。」

と答へて、話を進めてゆかなくてはなりません。年齢に從ひ、かういふ簡單な差出口が、だんだん知識的にかはつてゆきますが、それぞれ年齢に應じて、答を與へてやるべきであります。

七、お話は實感的且つ活動的であるべきこと

幼兒のお話で大切なことは、實感的でなければならぬといふことであります。幼兒は、頭腦が幼稚で、知識が發達してをりませんから、自分が、感覺的に經驗したことより外には、理解

することが出來ません。それ故幼兒にお話するには、彼等が、耳で聞き、目で見、手で觸れて、直接經驗した材料をもつて話さなければいけないのです。抽象的なことは、全く解らないのであります。例へば、ここに『生命の水』といふ言葉があるとします。成人は、その言葉によつて、何か、精神的なあるものを聯想することが出來るのですが、子供は、冷たい水とか、ざあざあ流れる水とかを聯想するにすぎません。『こころの珠』といふ言葉があるとします。成人はそれによつて、何か貴い性質といふやうなものを考へることができませうが、子供は、赤い玉とか、まるい玉とかを聯想するにすぎないのです。それですから、幼兒にお話をするには、絶對的にかうした抽象的な言葉をさけ、具體的な、感覺的な言葉を使はなければいけません。

それからまた、子供は非常に活動的なもので、ちよつとの間でも、じつとして居ることが嫌ひであります。それですから、子どものお話も、極めて活動的なものでなければならないのです。お話の主人公は、絶えず動いてゐなければいけません。お話の場所は、絶えず變つてゐなければいけません。これが幼兒譚の秘訣であります。

幼兒は、經驗の淺く、見聞の狹いものですから、お話の材料は、できるだけ彼等のよく知つてゐるものの中から擇ばなければいけません。犬とか、猫とか、雞とか、彼等の常に見馴れてゐる動物、玩具であるとか、汽車や電車や自動車であるとか、彼等の常に關心をもつてゐる物を材料としたお話を、彼等は最もよろこぶのであります。

それから、幼兒はまた善惡正邪を判斷する道德性が發達してゐませんから、教訓的なお話をすることは無駄であります。お話に、何か教訓がなくては氣がすまないといふのは、成人の考へ方なので、大きい子供でさへもあまりに露骨に教訓的な話は嫌がるものですが、況して幼兒の話に教訓などは禁物であります。昔からの民譚には、勸善懲惡を主としたお話が、きはめて多いのですが、それはお爺さんお婆さんたちが、自分の心の要求から作りだしたもので、決して子供に忠實なものであるとはいへません。例へば「舌切雀」のお話にしてもですが、お爺さんが、雀のお宿へ行つて、御馳走になつて、寶物をたくさん貰つて來るのはよいとして、そのあとへどうしても慾張り婆さんを出し、重いつづらを出し、お婆さんを懲らしてやらなければならぬ。と考へるのは、成人の考へ方であります。子どもたちには、寶のつづらだけで話をうちきつても、決して不滿足なことはないのであります。

八、繪ばなしと人形ばなし

幼兒は、頭腦が發達せず、從つて言葉の數も少ないのでありますから、幼兒のお話には、耳から言葉によつて傳へるだけでなく、目から、視覺をもあはせ利用しておはなしをするのが、大變よい方法であります。この方法の最も單純なのは、指ばなしといひまして指を使つてお話をするのです。つまり、指を人間にして、『坊や、お前どこへゆくのですか』『僕、幼稚園にゆくのですよ』『ぢやあ、一緒にゆきませう。』といふ風に話をしてゆくのであります。

次には繪ばなしであります。これは繪本を見せて、說明的にお話をしてゆくので、どこの家庭にも見うけられる方法です。これがだんだん專門的に發達したのが、例の紙芝居であります。この頃は家庭用の紙芝居も出來てをります。さらに大がかりになると、專門の童話家のやる繪話しになります。

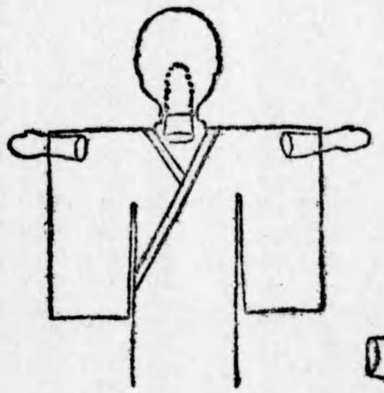
繪話は平面的でありますが、それが更に立體的になりますと、人形話となります。お人形さんをつかつてお話をするのであります。これは、普通あり合せのお人形をつかつてお話をするだけでよいのですが、それがさらに進んでゆくと人形芝居となります。この人形にはいろいろの種類がありますが、家庭で簡單につかへるのはギニヨール（指遣ひ人形）で中指の尖端を首に突つこみ、小指と拇指を手にして、いろいろと動かしながらしぐさをするのであります。このお人形は、近頃は夜店でも賣つてをりますが、種類が少ないので、いろいろなお話をすることは出來ません。いろいろと變つたお話をするには、それぞれの人形を拵へるのであります。人形を拵へることとそれ自身に興味があり、出來上つた人形を觀賞する面白味があり、さらにそれを使つてお話をする興味と、三重の興味がありますから、家庭の娛樂として誠に結構なものであります。どなたも試しにやつてごらんになることをおすすめいたします。

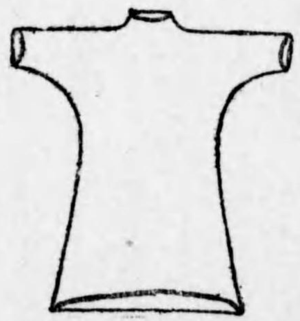
指遣ひ人形には、木製のものと、陶器製のものと、紙製のものとがあります。木彫のお好きなお方は、木製のものをお拵へになるがよく、陶器を燒く便宜がありましたら陶土をこねてお拵へになるがよく、どちらも趣味の多いものであります。しかし一般の家庭でお拵へになるには紙製のものが一番簡單に出來ますから、その拵へ方を傳授いたしません。

まづ新聞紙を切つて水にひたし、お鍋に入れ、三四時間煮て、どろどろにいたします。それ

第一圖

第三圖





第二圖

第四圖

に小量の膠を入れ、扱ひよくなつた時に、それを固めて、思ふやうな形の顏をつくるのです。そして出來上つたものを天日に乾かし、それに糊粉を塗り、繪具で彩色をします。

最初に頭をつくる時、首のところに、中指の尖を入れ、恰度指が入るほどの孔を開けておかねばなりません。それが適度にかわいた後、畫用紙を圓錐形にまるめ、首の下に四五分出る位に突き込んで孔の內側へはりつけておけば、指が安定して一層使ひよくなります。（第一圖）

頭髮は、絲でつくつて膠ではりつけます。絲は、何の絲でもよいのですが、老若男女、髭の形などによりそれぞれ適當なものを選ぶがよく、髭は、はじめに形を拵へておいて、そつくり貼りつけるのです。

つぎに指を拵へなければなりません。これは桐の木のやうな、軟らかい材料をつかつて、適宜に小刀で彫ります。使ひのこりの杉箸ででも出來ないことはありません。

手首が出來ましたら小指と拇指との指尖にはまるやうな畫用紙のパイプをつくり、それを手首に取りつけます。これは糊で貼り付けた上を、絲でしつかりとくくるのであります。（第二圖）

首と指とが出來上れば、身體を作ります。身體は白木綿などの丈夫な切で、頭の入るところと手の入るところだけをあけて作り、そこへ頭と手をつけるのです。夜店で賣つてゐる人形などには、身體はなくて、いきなり着物をつけてありますが、あれでもよろしいのであります。着物は、ありあはせの小切れ、何でも利用して造れます。（第三圖と第四圖）殆ど何の使ひ途にも

ならないやうな小切れが、立派な王様やお姫様の着物になりますから、誠に樂しみなものであります。

夜店で賣つてをりますギニョールは、一個十錢位のものでありますが、種類が僅かで材料も粗雜であります。幼稚園用品として賣出されてゐるものは、一個五十錢もいたしますから、假りに舌切雀のお話をしますにも、お爺さんとお婆さんと雀だけで、もう壹圓五十錢かかります。「桃太郎」のお話でしたら四五圓もかかるのであります。お話代としては餘りに高價であります。家庭で造りますれば、原料は全部廢物で濟み、おまけに自分の創意を表現することが出來まして、誠に愉快なものであります。もしも、それを子供たちに手傳はせて造りますなら、子供の創造力、構成力を發達せしめる上によい效果があり、假令拙い形であつても、子供自身の造つた、お人形が出來上り、生きて物をいひ、活動することによつて、子供に齎される喜びは非常のものであります。

人形芝居は、お人形遊びと、お話とが一つになつたものでありますから、子供に喜ばれるのも無理もないことであります。これが更に發展すれば、子供自身が、お人形のかはりに物をいひ、活動する兒童劇となるのであります。つまり兒童劇は、童話の立體化したものでありまして、お人形話は、その中間にあるものといつてよいのであります。兎に角、かういふ風に、聽覺に訴へると共に視覺に訴へるお話の方法は、幼兒の教育上に效果が大きいのであります。

九、お母様は童話を改作する權利があること

前にも述べましたやうに、成人の感心する話、必ずしも子供の喜ぶ話ではないのですが、ほんたうに子供の心になつて、ほんたうに母親の立場から見る時に、世の中に行はれてゐる童話に、どれほど滿足な話があるかといふことは、ちよつと判斷に苦しむほどであります。

そこで、お母様たちが、お話の材料がないとおつしやるのも無理のないことであります。それゆゑ私は、お母様たちに、童話を語り改めることの權利があることを申上げたいのです。新しい創作童話には新しいなりに、古い口碑童話には、古いなりに、それぞれ家庭のベツドタイム・ストオリーとして、面白くない要素を含んでゐることがたびたびあります。さう云ふお話に對しては、お母様方は、その母親としての立場から、遠慮なしに、作り替へる權利がある

筈です。しかし、改作の權利を認めると同時に、改作の技倆をも要求しなければなりません。これについて一二の例を申上げませう。

私どもの關係してゐます會の中に女人童話會といふ會があります。學校の女教師たちや、幼稚園の保姆さん方や、お母様やお姉様たちが集まつて、お話の研究をするのが、この會の目的であります。先達て築地本願寺の和光童園でその例會を開きました時、H子さんといふ、まだわかいお嬢様が、小人の靴屋のお話をなさいました。このお話はドイツの童話で、巖谷小波先生などもお話しになつたことのある、よく知られてゐるお話であります。あるところに貧しい靴屋の夫婦がありまして、たいへんよくはたらくのですが、いくら稼いでも貧乏です。稼ぐに追ひつく貧乏なしといふが、この夫婦は、いくら稼いでも、貧乏神におひつかれ、たうとう靴一枚分の皮だけしかなくなつてしまひました。その皮を、臺の上にのせて、淋びしい寢床に入りましたが、翌る朝起きて見ると、なんとまあ、その皮が、何時の間にか、素敵に立派な紳士靴に變つてゐるのです。貧乏靴屋の下手な腕には、とても思ひもよらぬやうな立派な靴！夫婦のものは大喜びで、それを店に並べて置くと、立派なお客様が來て、その靴を高い値段で、買つてゆきました。靴屋夫婦は、そのお金で、皮をうんと買入れ、臺の上において、寢ました。すると、翌る朝になつて見ると、その皮が、又すつかり立派な靴になつてゐるのです。毎晩毎晩、そんなことが續いて、靴屋は、大變お金もちになりましたが、一體誰が、その靴を拵へるのだらうと、いくらぼんやりな靴屋夫婦でも、疑問をおこしまして、ある晩に、そつと眠つたふりをして見てゐますと、可愛らしい小人が二人、何處からかやつてきて、せつせつと靴を拵へてゐるのでした。さては、あの小人さんの仕業だ、まあ、何といふ親切な小人さんだらう、お禮に何か拵らへてあげようと、二人のもの相談をしまして綺麗な着物を拵へ、寢しなに、靴を拵へる臺の上に置きました。翌る朝になると、その着物はなくなつてゐましたが、それきり小人は來なくなりました。このお話は、似よつたお話がいくらもあつて、いくらかづつ皆違つてゐるのですが、H子さんは、これをすつかり、自分の好きなやうに作り替へてしまはれました。

一體お伽噺には、お爺さん、お婆さんが多く出るのです。桃太郎のお話も序話はお爺さんと

お婆さんのおはなしです。舌切雀のお爺さんとお婆さん、かちかち山もお爺さんとお婆さん、花咲爺もお爺さん、です。このやうに、お伽ばなしの主人公に、お爺さんお婆さんが多いのは、なぜかといふと、かうした民話が、おほむね、お爺さんお婆さんによりて語り傳へられてきたからです。もはや、浮世のつとめを果たしてしまつて、用事のない、お爺さんお婆さんには、子供のお守りが仕事でありました。從つて、お話を語り傳へる役目は、それらのお爺さんお婆さんにあつたのです。自然、お話の中に、お爺さん、お婆さんが、やたらに出て來るやうになつたので、またそれが、お爺さん、お婆さんの口から語り出される時に、いはうやうのない親しさが籠つてゐたに違ひありません。前にのべました、お母様と坊やが、動物園にゆく話でも、それがお母様の口から語り出される故、特に親しさがあり、面白いのであります。それ故、お爺さんお婆さんの口から語られたと同じやうな親しさと面白さが、同じ話で、お兄さま、お姉さまの口からも得られるかといふと、さうはいかないのであります。そこでお母さまなり、お姉さまなりがお話をなさる場合、時としてはお爺さん、お婆さんの傳統的形式を破つても差支ないことになるのであります。

前に述べた、桃太郎、かちかち山、舌切雀、花咲爺などの例では、話の主人公は桃太郎であり、兎であり、雀であり、犬であつて、お爺さんお婆さんは、ワキ役であるのですが、時としては又、お爺さん、お婆さんが主人公になつてゐるものがあります。しかし、どちらかといへば、子供の話には子供を主人公とした方が、喜ばれるやうであります。殊にお話を聞く子供と、同じ位の年齢の子供としたら、尙更喜ばれるのであります。

假りに、前述の、靴屋の話を、子どもの靴屋にかへてしまつたらどうでせう。『子供の靴屋なんかあるものか』といふのは、成人の考へ方です。子供は、おままごとの中では、お父様にでも、お母様にでもなり得るやうに、お話の中では、大將にでも、王子様にでもなれるのであります。靴屋になることなどは、朝飯前のことであります。

そこで私の感心しましたのは、H子さんが、この靴屋の夫婦を、太郎さんと、花子さんといふ、子供にかへて話されたことであります。太郎さんと花子さんとが、靴屋のお店をひらいてゐる。夜中に小人が來て、小さな小さな金の靴を、こしらへておく。あくる日小人が來て、その金の靴を、大へん高い値で買つてゆく。その次の朝には、大きな大きな、軍艦のやうな靴

が拵へてある。あくる日は、巨人がやつてきて、その軍艦のやうな靴を買つてゆく。あとは原話と同じ筋でありますが、如何にも面白く、聞きよい話で、子供たちの喜んだことはもとより、傍で聞いてゐる私も、すつかり嬉しくなつてしまひました。

ここで一寸御注意いたしたいことは、子供の名のことであります。子供の名は、太郎さん、花子さんといつたやうな、どこにでもある平凡な名がよいのです。どうかすると、ひどく六ケしい名を、お話の中で見つけることがありますが、子供には親しみがなく、覺えにくく、大變興を殺ぐのであります。時としては又、皆様たちのお子様さまの名を、そつくりお使ひになるのもよいことでありませう。

さて、話は元に戻りまして、Hさんの次に、來賓のUさんに、私から注文して、お話をしていただきました。Uさんのお話は鼠のお寶のお話、これはよく地方の民話にある型のお話で、お爺さんが、山でお辨當のおむすびをたべようとしてゐると、そのおむすびが、ころころところげて、穴の中にはひつてしまひます。自分もそのあとを追ひかけて、穴の中にはひつて見ると、多勢の鼠があつまつて相談をしてゐる。お爺さんが、にやあと猫のまねをすると、鼠はそれ猫が來たと、驚いて逃げだす。お爺さんは、そこで鼠のお倉から、たくさん寶をぬすんで歸つて來るのです。お婆さんがそのことを聞き、自分も寶がほしくなつて、爺さんのやつた通りのことをすると、鼠たちが、それ、此間の盗賊が來た！　といふので、よつてたかつて、お婆さんを、半死半生の目にあはすといふお話。

昔の民話は、無智な、低級な社會に發達したものですから、かうした、下卑たお話が多いのです。これをU氏がどういふ風に話しかへられたか、そこが聞きものであります。

お爺さんが、穴の中に入つてゆくまでは、原話の通りで、穴の中にはひつて見ると、鼠たちがお餅をついてゐる。お爺さんが、餅つきのお手傳ひをすると、鼠たちがよろこんで、お禮にたくさんの寶物（といつても、キヤラメルや、チヨコレートなどです）を呉れる。お婆さんがそれを見て、自分も貰はうと思ひ、山へ行つて、わざとおむすびを穴の中におとす、さうして中へ入つてゆくと、鼠たちがたくさんゐるので、ひよつと惡い心をおこし、猫のまねをして、ニヤアとなくと、鼠はびつくり仰天、皆お倉の中ににげこんで、戸をしめてしまつた、それでお婆さんは何も貰ふことが出來ず、空手でかへりましたが、お爺さんは、お婆さんを可哀さうに

おもひ、自分のキャラメルや、チョコレートを半分わけてあげました。といふのです。なんときれいな、上品なおはなしではありませんか、下卑た、汚いお話でも、話し手によつてこんなにも變るものかと思ふほど變るのです。

第七章　童話の教育的意義

童話が子供の教育にどの位大切なものであるかといふことは、今まで述べた所で、すつかり御分りになりましたことと存じますが、もう一度念のため、結論といふやうな意味で、一と纒めに、申上げて見ませう。勿論、教育的といひましても、學校教育に關聯していへば、あるひは修身科の上に、或は國語教育の上に、それ〴〵重大な問題があるのですが、さういふ特別な場合のことは除き、極く根本的のことだけを申上げるのです。

子どもの立場からいへば、童話は面白いから聞きたがるのです。面白いといふのは何故かといふと、子供が本能的に童話を要求するので、つまり、お菓子がたべたい、遊びたい、といふと同じことであります。既に生れながらもつてゐる本能でありますから、之を妨げることは出來ないので、必ずやこれをよく善用し、善導して、子供の心と肉體の發達に役立つやうにしなければなりませぬ。お菓子がたべたいのは、子どもの本能によるものであります。子供にお菓

子を三日もたべさせずにおいてごらんなさい。きつとひもじげな、鄙しげな顏になります。それればかりでなく、身體にも故障を來して來るでありませう。子どもを家の中にとぢこめて、勉强ばかりさせ少しも遊ばせずにおいてごらんなさい。きつといぢけた、力のない子になつてしまひます。それは運動が不足なためばかりでなく、遊ばないといふことのために、精神そのものがいぢけて來るのであります。童話の場合に於ても同じことであります。

さらば、童話をきくために、子供がどの樣な利益をうけるかといひますと、子どもは、童話に於て自分が心から要求してゐるところのものを、豐かに滿たされることにより、非常な精神的滿足を感ずるのであります。子供の旺盛な探奇心、冒險的精神、正義感、征服感といつたやうなものが、童話の中には例外なしに、十分に滿たされるのでありますから、子供の心は非常な愉悅を感じ、それによつて心が引き伸ばされ、活動的になり、ずん〳〵と發育成長するのであります。それが成人するにしたがつて、いろ〳〵な方面に力をあらはして來ます。

一體人間の生活の原動力となるところのものは、肉體的な欲望もありますけれども、より大きな生活を創造するものは叡智であります。而して叡智を生むところのものは人間の想像力と探求力とであります。大きな生活には必らず大きな想像力が伴ふので、大きな事業、大きな藝術、すべて大きな想像力なくしては生れぬのであります。それでありますから、兒童の教育に於ては、その想像力を重んじ、その發動を促し、それによつて、兒童の心を廣くし、深くし、擴大し、充實することが必要なのでありますが、殊に想像期の兒童において、このことが最も大切なのであります。昔からの偉人の中には、その幼時に於て、童話を滿喫し、それによりて大きな想像力を養ひ、豐かな性格を造り上げた人が多くありますが、中でも顯著な例は、ゲーテでありませう。

近世において殆ど奇蹟的といつてもよい偉人はゲーテであります。あらゆる人間の才能が、最も均整的に、極度に發達した典型的な巨人といつてもよいのは彼で、同時に大文學者であり、大科學者であり、大政治家でありました。かういふ人物は容易に世にあるものではなく、一般を以て論ずべからざるものでありませうが、しかしゲーテの生活の裏に、豐かな童話があつたといふことは看過すべからざることであります。ゲーテのお母樣のアーヤ夫人は、豐かな詞藻をもち、童話の大好きな人で、常に、ゲーテにいろいろな童話を語つて聞かせました。そのお

母様の口づから話された童話がゲーテの心に非常に深い感化を與へ、終生衰へない童心となつたのであります。このことはゲーテ自ら書いたものにより明かに知られて居ます。私は、すべてのお母様方が大なり小なり、ゲーテのお母様アーヤ夫人に學ばれることをおすすめしたいのであります。

このやうに、曠世の偉人が、童話によりて其の生涯の礎石を置かれた例の外に、凡人も凡人、寧ろ凡人以下の低能兒が、童話によりて其の心を引き伸ばされた例もしばしば見聞し得るところであります。私の知つてゐる某訓導の擔任した學級に極めて成績の悪い生徒がありました。教師も彼を低能と思ひ、親もこれを低能と思ひ、生徒自身も低能と思つてゐたのであります。彼は教室に於て教師から問をうけても、未だ嘗て答へをしたことがありませんでした。ところが或る日のこと、修身の時間に教師が桃太郎のお話をしました。すると此の子の態度が平素とは全く變り、顏を赤くし、目を光らし、一心に先生の顏を見つめながら、熱心に傾聽してゐるのです。教師は、この低能兒の變調を見落しませんでした。彼は突嗟に、この子に對して問を發したのであります。すると平素何を問はれても、ウンともスンとも答へぬ兒が、すつくと立上つて、實に立派に、明瞭に答へました。教師は「おお、その通り、よく出來ました。えらいえらい」とほめて話をすゝめ、爾來童話を話すたびに、この子に向つて問ひを發し、次第にその心を引きのばして行つたところ、この子の成績は著しく上達して、つひに優良兒として小學校を卒業したとのことであります。

思ふにこの子は、心理的に見てたしかに不健全な子であつたにちがひありません。いはゆる偏屈者、臆病者で、遺傳の爲にか、環境の爲にか、兎に角容易に自己を表現することの出來ない、内氣な子であつたのです。失敗して笑はれ、笑はるる毎に益々内氣になり、自己について失望し、自ら低能兒となつてしまつたのですが、本來知能に於て缺陷がなかつたのです。かういふ心理狀態が先生によつて理解されず、自分には勿論解らずにゐたのですが、いつも聞きなれてゐる面白い童話を先生の口から聞いた時に、彼の衷にあつた力が、彼の心をとりまいてゐる強い殼を破つて爆發したために、彼の本來もつてゐる性能がそこに輝き出したのであります。そこに彼の自己發見がありました。自己發見は跳躍であり、向上であります。彼は忽ちにして曩日の自己と異つた優良兒となりました。これは實に童話の賜であつたのです。しか

し、童話が子供に與へる喜びのいかに大きいかといふことを知らぬ教師であつたならば、この子の折角の感激も輕々しく看過されてしまひ、彼は依然たる低能兒として學校を卒り、一生低能者として終つたかも知れないのです。これを考へる時に、童話の教育的使命は一通り重大なものではないのであります。

第八章　子どものアニミズム

「パンツもしないで
　なんにもしないで
　丸いお月さま」

面白い歌でせう。これは東京の平岩由伎子さんといふお子さんが、三歳の時にお作りになつた歌です。このお子さんの歌は、お父さんが、氣をつけて、書き集めてお聞きになつて、「人形の耳」といふ本になつて出てゐます。

まるいお月樣は、由伎子さん自分の顏のやうに、目も鼻も口もある、まるいお顏にも見えたでせう。またまるまるとふとつた、一つのからだにも見えたでせう。また、可愛らしい、まるいお尻にも見えたでせう。そのお月樣が、パンツもしないでゐることが、この由伎さんには、

よつぼどをかしく見えたか、すてきにすずしさうに愉快に見えたか、とにかく、平常パンツをはくやうに習慣づけられてゐる自分にくらべて、お月様の、ノーパンツに興味を感じた心が面白いではありませんか。

私は、子どもの作つた歌を、隨分澤山見てゐるつもりですが、この位原始的な、子供のアニミズムをよくあらはしたのは見たことがありません。

アニミズム Animism といふのは、生命のないものを、生命のあるやうに考へることであります。子どもは、頭腦が單純でありますから、すべての外界のものを、自分と同じやうなものであると想像し、日でも、月でも、木でも花でも、自分と同じやうな人格をもつものと考へるのであります。成人にとつては、人形は人形であり、玩具は文字通り玩具でありますが、子供にとつては人形でも、玩具でも、單に成人の考へてゐる人形や玩具よりは、より以上のもの、もう少し大切なもの、もつと〳〵重大なものであります。それは、彼等自身と同じに生きてゐるものなのであります。そこで、幼い由伎子さんが、大空にかゝつてゐる月を見て、自分と同じやうな、子供の一種であると想像し、その、ノーパンツを不思議に思つた理由もよくわかるでありませう。

かういふ考へ方が、段々と複雜にはたらいてゆきますと、そこに、成人のよび方でいふと、「自然神話」Nature Myth といふ、一種の詩のやうなものになります。それは、次のやうなものであります。

『あるとこに
いつぱい、鶴ととがゐたんです。
空のたかいとこ
眞紅なお富士さんが
ぱつとつかんぢやつたんですの、
鶴とゝを。』

やはり由伎子さんの歌です。この鶴とゝは、たゞの幻想かも知れない。それとも夕燒の空に

飛んでゐるちぎれ雲を、鶴に見立てたのかも知れない。とにかく、雄大な富士の峰を、一つの妖怪的な存在と見て、それが澤山の鶴をつかまへたと考へたのです。これは成人のいはゆる自然神話です。

京都の岩井のぶ子さんの歌にも、このやうな自然神話がよくあらはれてゐます、これはのぶ子さんの、四歳の時のお作です。

『黒いくもが
水をいつぱいくんで
走つてくる
どんとこけたので
水が
ぱらぱらおちてきた。』

『白い山の上に
赤いくもがあるいてる
のんの様よびに
あかいべべきて
ゆくのです。』

かういふ風な物の見方が、次第に複雜になり、深刻になつてゆきますと、そこに詩歌が生れ、宗教が生れ、哲學が生れて來ます。つまり幼兒のアニミズムは、成人の文學、宗教、哲學などの萠芽なのでありまして、童話が子どもの藝術であり、宗教であり、哲學であるといふことは、單なるたとへではなく、本質的の問題なのであります。

科學的教育を過信する、ある種の人々は、幼兒のかうした考へ方を間違つたものと考へ、ある時機に於てそれを科學的な考へ方に轉向させることが必要だと主張します。けれども、實はかういふ考へ方は、右にも左にも轉向させ得るものではなく、科學的な考へ方はむしろある時

機に於て、別に本質的なものをして、發生して來るのであります。つまり詩的な考へ方と、科學的な考へ方とは、並行して發達すべきものなのであります。それは、詩と科學とが、本來反對的なものではなく、二つの異つた觀點から宇宙を見るもので、双方ともに眞實だからであります。さうして、科學的知識の發達するにしたがひ、アニミズム的思考の形式は、次第に洗練され、進行してゆくのであります。

『電氣はね、
針金でね、雷さまを引つぱつて來たんです、
白い髯はやして、天井にゐるんです
雷さま、ピリピリピリツてなくんです。』

この歌などは、その科學的な考へ方が、幼稚な形をとつてあらはれはじめたものであります。

童話が、何故子どもの教養に缺くべからざるものであるか。それは、かうしたゆたかな想像力によつて、彼等の心が擴められ、深められるからでありますが、もそつと學問的にいひますと、童話にふくまれたアニミズムが、子どもの心に、詩歌と宗教との種を植ゑつけるからであります。

偶然にお月様とパンツの歌を引合ひに出しましたが、これからはいよ〳〵お月様の季節、すみわたる大空に、光りすずしくさえわたり、千里の外をも同じく照らす、何といつても月のなかめは秋であります。そこで、もう少し月のお話をいたしませう。「月前に童話を語る」なんて、なか〳〵風流ではありませんか。

私たちは、誰でも、月がその昔、地球が火の玉だつた時分に、その激しい燃燒の中から、どうかして飛び出した火の玉の遺物であること、地球の三十何分の一かの大きさで、今ではもはやすつかり死滅した屍骸にすぎないことなどを知つてゐます。それゆゑ、月の中に、兎が住んで餅を搗いてゐることをも考へず、ましてや、お月様がノーパンツでゐるとて、不思議に考へ

ることはさらさらありません。けれども、仲秋一夜、さえ渡つた月に對して立つ時、そのいはうやうのない神秘的な美しさに、誰か心を動かさないものがありませう。

ながむるもまことしからぬ心地して世にあまりたる月のかげかな

行方なく月に心のすみすみてはていかにかならむとすらむ

くまもなき月の光にさそはれていく雲井までゆく心ぞも　（西行）

など、古往今來、洋の東西をわかたず、月にむかつて思ひをのべ、悲みを訴へた詩人は、幾百千人あるか、數へることが出來ぬのでありますが、私どもは、たとへ科學的には月が一塊の冷たい土であることを知つて居つても、感情的には、十分さうした詩人の心もちに共鳴することが出來るのであります。あの「荒城の月」といふ歌が、天下に愛唱せられるのは、その作曲の妙にもより、またそれを好んで歌つた藤原義江君の歌の妙にもよるでありませうが、一つには、その月前に古を懐ふといふ、深い哀傷が原因をなしてゐるのでありませう。さうして、さういふやうに、月に對して思ひを記し、悲しみを述べるといふことは、自然の中におのれの生命を感じ、萬有の中におのれの姿をみとめる、私たちの汎神的思想から出て來るのであつて、この汎神的思想こそは、幼童時代のアニミズムにその芽を萌すのであります。

私たちが、單に物質的に、機械的に、宇宙の一部分であるといふだけでなく、私たちの生命と、宇宙の生命とが、本來同一のものであることを直感し、私たちおのおのの存在を宇宙に託するこの信仰こそは、私たちに與へられた何よりも貴いものでありませう。かかる信仰ありて始めて、人類の歴史に、われ〳〵の事業に、意義を生じて來るのであります。これはアニミズムとはもう少しかはつた、もつと深い哲學的根據のある考へ方でありますが、その初めの形式はアニミズムであつたにちがひありません。さういふ點から考へて、子どものアニミズムは、ある科學教育心酔者の考へるやうに、簡單に轉向させ得べきものではないのであります。また、簡單に轉向するものであつては、人格的教養の上に大へんな支障が出來てくるのであります。

お八つのむぎ

ボン　ボン　ボン　お時計が三つなりました。三時です。

『ほうら　お八つの時分だ』

とお兄さんひよこのピヨコ吉さんは急いでお八つの袋を首にかけました。お姉さんひよこのチイ子さんも

『おやもう三時　お八つよ早く行きませう』

とお八つの袋を首にかけました。するとそばにゐた赤ちやんひよこのチョン子さんも

『お八ちゆ　あたちも　ゆきまちよ』

とお首に袋をかけました。三人はお八つの袋を　ブラ　ブラ　させながら　チョッ　チョッ　チョッ　チョコ

『おや　おや　はやいこと、よくお時計がわかりましたね、さあ〳〵美味しいお八つの麥あげませう。』

とお母さんの鷄は大きな袋の中から美味しいむぎを澤山出してみんなの袋の中に入れてくださいました。

『お母さんのお八つの袋は大きいなあ』

とピヨン吉さんが言ひました。するとチイ子さんも

『まだ〳〵まだ〳〵入つてるお母さんのお八つの袋は大きいね』

と言ひました。赤ちやんのチョンコさんもすぐ眞似をして

『大きい　お八ちゆ　お母ちやまもお上んなちやい』

と言ひました。そうとすると奥にゐたお父さんの鷄さんも出てきて

『このお父さんにもお八つ下さいな』

と言ひました。みんなはよろこんで

お父さんもお八つ　　お母さんもお八つ

僕らもお八つ　　みんなそろつて

美味しいお八つ

とうたひながら、ひよこ達は急いで袋の中にお首を入れて　チツ　チク　チツチク　食べはじめました。

『おや　おや　みんなは忘れんぼ　三人揃つて忘れんぼ』

とお父さんが笑ひました。チョン吉さんは

何んだろう？

とこつちへお首を曲げました。チイ子さんは

何んでせう？

とあつちへ首を曲げました。

赤ちやんのチョン子は

何んでちよ

と兩方にお首まげました。お母さん鶏はニコニコ笑つて

『教へてあげませう、そこらまで、イのつくごあいさつ忘れた』

とうたひました。チョン吉さんとチイ子さんはすぐ思ひついて

『いたゞきます』

とぴよこんとお首をさげました。すると赤ちやんのチョン子さんも

『あたちも　いたゞきまちゆ』

とお首をさげました。

みんなはちつともこぼさないで、ひとつも残さないできれいにお八つを頂きました。

『僕お行儀いゝでせう母あさん』

『私もきれいでせう母あさん』

『あたちも　きれい』　つて、

おや　おや　大きいお父さんとお母さんのおひざから　大きなむぎがこぼれました。お庭の

土にこぼれました。そして小さい可愛いゝ芽を出しました。
雨が降つて、日が照つて、そよ〳〵そよ〳〵風が吹いて麥がだん〳〵大きくなつて、美味しいむぎが澤山澤山なりました。
ピョン吉さんはそれをみて
『おや　おや　僕も　みんな食べないでお庭の土に殘しておけばよかつたな』
と言ひました。
チイ子さんも
『私もそうすればよかつたわ、こんどそうしませうね』
と赤ちゃんに言ひました。赤ちゃんのチョン子さんもすぐに眞似して
『あたちもね、そうちまちよ』
と言ひました。

（高山敏子氏作）

〔註〕高山敏子さんの作。この中に現れてゐる鷄たちの生活はそっくり幼兒たちの生活でありますから、子供がよろこぶことは非常なものです。赤ちゃんの片言が子供をよろこばすことも見のがしてはなりません。模範的な幼兒童話であります。

雨の子供と涙の子供

青いお空で眞白いムクムク雲がゆつくり、ゆつくり泳いでゐました。そのなかで小さい雨の子供たちがかくれんぼをしてあそんでゐたのです。そのうちにどこやらか冷たい風がスウーイスウーイと吹いてきました。おや　おや、白い雲がだん〳〵くろくなつてゆきます。それに冷たい風はどんどん雲を下の方へ吹きおろして行きます。雨の子供達はよろこんで
『おやだん〳〵僕たちまで下へゆくよ、面白いなあ　飛行機にのつてるみたいだ』
『うわあ　はやいはやい　だん〳〵はやくなる、あれ〳〵なんだか大きなものがみえるよ、何だらう？　山だ山だ』
『たくさん山ならんでゐるよ　あのおつかない入道雲の小父さんみたいだねえ』
『おや山の下の方にまだ何かあるよ。川だ、石ころがいつぱいある。そのそばは畑らしい、お野菜がたくさんあるね、花も咲いてる』
『花つてきれいだねえ、僕はやくあの花のところにゆき度いなあ、』

『金魚もゐるよ、それから鯉、なんだか元氣がないなあ、ハア　ハア　とても疲れてゐるやうだよ』

『あゝ今度は人が來た、黑い着物きた人がきた、一人　二人　三人きたよ、お花のところへしやがんだよ』

雨の子供達は、キヤツ　キヤツ　さはぎながら雲に乘つてどん〳〵下へおりてきました。雨の子供たちには下の方のいろんな事が、それは〳〵珍らしくてならなかつたのです。

今お花のところへしやがんだ黑い着物の小父さん達は何か小さいこゑで話し出しました。

『あゝあ　こんなに曇つてきても雨はふらない。もう土の上はこんなにから〳〵だ、川にだつて一滴の水もありあしない、この可愛い花ももう枯れるだらう。こんなにしほれてしまつた。』

『お野菜だつてお米だつてぢき死ぬだらう、ほんのちよつぴりでもいゝのだがなあ、降つてくれないかなあ』

『ほんとうだ　私達のこの涙位でもいゝ　そうしたら　どんなに嬉しいだらう』

そんなお話をして三人の小父さんは一しよに空を見上げました。そして雨の子供たちの乘つてゐる雲の方をぢつとみたのです。けれども、その話はちつとも雨の子供たちにはきこえませんでした。何故つてたゞ嬉しくて夢中でみんな大聲で話し合つてゐたのですもの、その時小父さん達の兩方の目から　ポトリ　ポトリ　とあつい涙が地面に落ちたのです。その涙はやつぱり小さい涙の子供でした。

涙の子供は小父さん達の目からとび下りるとみんなで　ヂヤンケンして　かくれんぼをはじめました。そして　する〳〵つと地面の下にもぐりこんでしまつたのです。

雨の子供はそれをみてびつくりしました。

『やあ　やあ、あの小父さんの目からも僕達の友達がとび下りたよ、そしてとてもはやくかくれんぼしちやつたよ、うまいねえ　目に見えない位だよ』

『僕だつてあの位はやく　かくれられらあ、負けやしないよ』

『とび下りやう　みんなで、そしてあの涙の子供とあそぼうよ』

『さあ　いゝかえ　一　二の三だよ、一二の三』

雨の子供達は競爭でさかさまになつて下へとび下りました。その時

パラ　パラ　パラ　パラ

とそれはそれは氣持のよい音がしたのです。そして雨の子供達はとびおりるとすぐまるで目にもとまらぬほどのはやさで　スウーツと地面にもぐりこんでしまつたのです。

雨の子供のお父さんやお母さんはびつくりして

『おや〳〵なんて氣の早い子供達だ　もうとびおりてしまつた。迷子になつたら大變だ、早くさがしに行きませう』

と大ぜい一度にとびおりました。そうすると

ザアーツ　ザアーツ

とそれは〳〵氣持のよい音がしたのです。

『私の子供はどこ』

『私の小供はどこ』

と雨の子供のお父さんや　お母さんはあはてゝ草の根やお池のなかへ　ビシヤビシヤとはいりこみました。

黑い着物の小父さん達は、はだしのまゝ外へとび出してびしよぬれになりながら

『やれ〳〵有難い、これで花も助かる野菜ものびる、あーあ雨は有難い、雨と言ふものは有難いものだ』

と何度も　何度も　おじぎをしました。

ぐんなりしてゐたお花も　草も　ツンとおきかへつて嬉しそうなお顏を空にむけました。川ではチヨロ〳〵と小石と水がお話をはじめます、お池の金魚や鯉達は

『そうれ　御馳走だ』

とおどり出しました。

（高山敏子氏作）

〔註〕前の話と同じ作者の作。幼兒のための自然譚としてすぐれたものです。

白い蝶

むかし、むかし、どこにも赤ちやんのゐなかつたときのおはなし。一番はじめに赤ちやんが生れたときのおはなし。おつばいのなかつたときのおはなし。

神さまはお父さんとお母さんにかうおつしやいました。

「この赤ちやんぢきにお父さんとお母さん位に大きくなりますよ。よく可愛がつてあげて下さいね」

つて、それでお父さんとお母さんは赤ちやんをまるで人形さんのやうに可愛がりました。だつこして、ちつともはなさないで。

あるときお母さんは赤ちやんをだつこしたまゝ、お父さんはそのそばで手まくらしたまゝお晝寢をしてゐました。すると急に赤ちやんが大きな聲で

オギヤアー——オギヤアー——

と泣き出しました。二人はびつくりして

「お母さん赤ちやんはきつと惡い蟲に刺されたのかも知れませんよ。それとも、とげ、かしら」

「おや何もゐない、とげもない。どうしたのでせう。何時までも泣いて」

お着物をぬがせたり、後をむかせたり、よしよしをしてあげたり、いろんなことをしましたけれども赤ちやんは

オギヤアー——　オギヤアー——

もつと、もつと、大きい聲で泣きました。二人は困つてしまつて泣いてる赤ちやんを抱つこして神さまのところへ御相談に行きました。すると神さまはニコニコお笑ひになつて

「あゝ、さう、さう、赤ちやんの食べものがありませんでしたねえ。さて何がいいかしら。では誰かにたのんで世界中で一番美味しい食物をさがしてあげませう、誰にたのみませうね、兎さんにたのみませうか」

さうするとお父さんが

「でも兎さんは大きな河が渡れないから遠くの方にある美味しいものが持つて來られません」

と言ひました。すると神さまは

「それではお空を飛ぶつばめさんにたのんではどうでせう」

とおつしやいました。これをきくと今度はお母さんが

「でも、つばめさんは強い嘴があるからよろしう御座いますが赤ちやんには齒もありません」

と言ひました。神さまはお首を曲げて考へていらつしやいましたが

『それぢや、あの翅のきれいな蝶々さんはどうでせう』

とおつしやいました、今度はお父さんもお母さんもよろこんで

『さう、さう、蝶々さんならきつと赤ちやんのよい食物がみつけられさうです』

と言ひましたので、たうとう、蝶々さんがそのお役目を言ひつかることになりました。

蝶々さん達は一番きれいな白いはねの着物をきて、ヒラヒラヒラヒラとんで來ました。

『さあこれから一番美味しい赤ちやんの食物をさがしに行くのですよ』

とはねを揃へてむかふのお山へとんで行きました。山にはきれいなみどりの葉つぱをつけた木や草が澤山にありました。

『あの葉つぱのおつゆがいゝかも知れない』

とみんなでそうつと下りて葉つぱのつゆをちよつとなめてみました。

『なんだか澁くてすつぱくて赤ちやんの食物には少し困りますねえ』

とみんな首を曲げてしまひました。その時

『おやこのお山の下の方になんだか赤いものが見えますよ。行つて見ませう』

と誰かゝ言ひますので、今度は、ふもとの方へはねをそろへて飛んで行つてみますと、そこは桃畑で美味しさうなあかい桃が澤山なつてゐました。みんなはきつとこれなら美味しいでせうと、その桃のおつゆをなめて見ますと甘くて少しすつぱくてとても美味しいのです。

『これがいゝ、これにしませう』

とみんなが言ひました。すると一番大きい蝶々さんが

『でもあんまり重くて持つて行かれません。それにこの桃のおつゆは美味しいですけれど、赤ちやんのおなかにあんまりよくないのです』

と言ひました。みんなはせつかく美味しいのがみつかつたのにいやだなあと思ひましたけれども仕方がないのでずん〳〵ずん〳〵下の方へとんで行きました。さうすると、まあきれいなきれいなお花畑に來てしまつたのです。赤や白や紫のきれいな花が風にゆられて靜かなをどりををどつてゐました。その度に良い香ひが蝶々さんの目を細くしてしまひました。

『こゝで私達もをどりませう。なんてきれいな花でせう』

と風と蝶々と花達が日のくれるのも忘れてあそんでしまひました。一番大な蝶々さんはびつ

くりして

『あゝみなさん私達は大切な御用があつたんぢやありませんか。もう、あそぶの止めて歸りませう』

とみんなを集めて歸らうとしますと花達が

『もし、もし、その大切な御用つてどんなことなんです』

ときゝました。蝶々達は困つた聲で

『可愛い赤ちやんの食物をさがしに來たのです。』

とお答へしますと

『ぢや一つづつこの花をお持ちなさい。きつとこの中に赤ちやんの食物が入つてゐますよ』

と優しく言ひましたので蝶々達はよろこんで自分の好きな色の花を一つづゝいたゞいて『さよなら、ありがたう』をしながら神さまのところへ歸つて來ました。神さまはそれをごらんになると

『まあ、よいものをさがして來ましたね、ではこの花の中の美味しい蜜を赤ちやんの食物にしてあげませう。その花をこちらに下さい』

とおつしやつて赤や白や紫の花できれいにお母さんの腦を飾つてあげて

『いつまでも、いつまでも、この花の美味しい蜜がお母さんのおつぱいから出るやうに』

とおつしやると今までちつとも出なかつたお母さんのおつぱいからボトボトボトと白い美味しいおつぱいが流れ出しました、神さまはよろこんで

『蝶々さんがた、どうもありがたう。これで赤ちやんのおつぱいが出來ました。ごほうびにあなた達はどこのお花の蜜を食べてもよいことにしませう』

と御約束して下さいました。赤ちやんもすつかり泣き止んで美味しいおつぱいを頂きました。たんとたんと頂きました。

それから白い蝶々さんはどこのお花ばたけへでも蜜を吸ひにゆけるやうになつたのです。

（高山敏子氏作）

〔註〕これも幼兒の爲の自然譚ですが大へん神話的な要素がふくまれてゐます。

小川のうたとをどり

遠くの原つばにね。川が流れてゐました。面白い歌を歌ひながら流れてゐました。

どんな歌でせう？。サラ〳〵サラ〳〵といふ歌です。それから時々石につきあたると、ゴボ〳〵ゴボ〳〵と歌ひますよ。それから時々低いところへ落ちると、ボチヤリ〳〵と歌ひますよ。

サラ〳〵、ゴボ〳〵、ボチヤリ〳〵……

川の歌は面白い歌ですね。

川は歌を歌ひながら、スーイ〳〵とまつすぐに踊りながら流れます。ユーラリ〳〵と曲つて踊りながら流れます。それから時々グル〳〵渦を巻いて踊りながら流れます。それから時々ブク〳〵と白い泡を立てて踊りながら流れます。それから時々キーラ〳〵と光つて流れます。

スーイ〳〵、ユーラリ〳〵、ブク〳〵、ブク〳〵、キーラキラ……

川のをどりは面白いをどりですね。

さうすると、川の岸に生えてゐる木と草がいひました。

『川さん、川さん、あなたの歌を聞いて、あなたのをどりを見ると、私たちはうれしくなりますよ。だから、あなたのそばへ生え出したんですよ。いいでせう』

『ええ、ようございますとも』と、川がいひました。

『それから、喉がかわいた時は、あなたからお水をいただきたいんですが』と、と草がいひました。

『どうぞ〳〵』と、川がいひました。さうして歌ひながらをどりながら流れて行きます。

サラ〳〵、ゴボ〳〵、ボチヤリ〳〵……　ほら！　スーイ〳〵、ユーラリ〳〵、グル〳〵、ブク〳〵、キーラキラ……

さうすると、木の上の鳥と、水の中のお魚がいひました。

『川さん、川さん、あなたの歌を聞いて、あなたのをどりを見ると、私たちはうれしくなりますよ。だから、あなたのところにゐるんですよ。いゝでせう』

『ええ、ようございますとも』と、川がいひました。

『それから、喉がかわいた時は、あなたからお水をいただきたいんですが』と、又鳥とお魚が

いひました。

『どうぞ〳〵』と川がいひました。さうして歌ひながらをどりながら流れて行きます。

サラ〳〵、ゴボ〳〵、ボチヤリ〳〵……ほら！　スーイ〳〵、ユーラリ〳〵、グル〳〵、ブク〳〵、キーラキラ……

さうすると、向から牛と、馬と、犬がやつて來ていひました。

『川さん、川さん、あなたの歌を聞いて、あなたのをどりを見ると、私たちはうれしくなりますよ。だから、あなたのところへやつて來ますよ。いいでせう』

『ええ、ようございますとも』と、川がいひました。

『それから、喉がかわいた時は、あなたからお水をいただきたいんですが』と、又牛と、馬と、犬がいひました。

『どうぞ〳〵』と、川がいひました。さうして歌ひながらをどりながら流れて行きます。

サラ〳〵、ゴボ〳〵、ボチヤリ〳〵……ほら！　スーイ〳〵、ユーラリ〳〵、グル〳〵、ブク〳〵、キーラキラ……

川の歌とをどりは面白いですね。

（上澤謙二氏作）

【註】　幼兒の爲の自然課ですが、これには神話的な要素が少く、極く平易の自然の活動を寓話化したものです。

鳩ポッポが眠るまで

高い〳〵ところにある巣の中にね。

お父さまの鳩と、お母さまの鳩と、兄さんの鳩と、妹の鳩がゐましたつて。

お父さま鳩もね、お母さま鳩もね、兄さん鳩も、妹鳩も、晝間は方々飛んでゐるけれども、夕方になると、みんな、自分のお家へ歸つて來ます。

さうして、ポツポー……ポツポー……と、鳴きながら、おはなしをします。

お母さま鳩がね。

『みんな、今日はどこへ行つて來ましたか？。代り番に、どこへ行つたかお話しませようよ。さア、お父さまからお話して下さい』といひました。

さうすると、お父さま鳩がね。

『私はね、遠くまで飛んで行つて、あつくてたまらなくなつたから、森の中を流れてゐる川の中へ降りて、足を濡らしたよ。そこの水は、つめたくて、つめたくて、とてもいい氣持だつた。お前たちのことも、いまにそこへ連れて行つてあげようね』と、おはなししました。

『ああ、私はその川を知つてゐますよ。きれいな水ですね』と、お母さま鳩もいひました。

それから、妹鳩がお話をしました。

『今日、私は向ふの林の中で、駒鳥だの、鳥だの、鶯だのといつしよに、いろ〳〵な歌を歌ひましたよ。とても面白かつたの』

さうすると、兄さん鳩がね。

『ああ、私はその歌をみんな聞いたよ』といひました『私は高い〳〵塔の天邊にとまつてゐた。私は世界中で一番高いと思つたら、お空はもつと高かつたよ。さうしてお日さまがキラ〳〵光つて、私の上を、フワリ〳〵と雲が通つて行つた。そから、下の方を見ると、白い私のお家が見えたので、うれしくなつちやつた。そこからいろ〳〵なものが見えたけど、自分のお家が一番よかつたね』と、おはなししました。

さうすると今度は、お母さま鳩がおはなしをしました。

『私は決してお家から遠くへ行かないの。今日もね、お庭の鷄さんのところへ行つたら、鷄さんは『おはやう、おはやう』つてごあいさつしました。それから七面鳥さんも「おはやう、おはやう」つてごあいさつしました。それから、私も「鷄さん、おはやう。七面鳥さん、おはやう」つてごあいさつしました。

さうすると、お家の中から、お嬢さんが出て來て「來い〳〵、來い〳〵」と、私達を呼んで、パラ〳〵パラ〳〵とお米をまいてくれたの。それで私たちは仲よくそれをたべました——。さア、おやすみ。もう、みんな眠いでせう』

『ポッポー、おやすみなさい、お父さま、お母さま』

『ポッポー、おやすみなさい、お兄さん』

『ポッポー、おやすみなさい、お父さま、お母さま』

『ポッポー、おやすみなさい、妹さん』

さうすると、お兄さん鳩と、妹鳩はグー〳〵と寢てしまひました。

それから、お父さん鳩も、お母さん鳩も『はい、おやすみ』といつて、グー〳〵と寢てしまひました。

みんなグー〳〵グー〳〵と、眠つてしまひましたよ。

（上澤謙二氏作）

〔註〕鳩の家庭を取扱つたお話、幼兒ばなしとして適當なのです。

汽車ぽッぽと乘合自動車

汽車ぽつぽと、乘合自動車のお話をしませうネ。

乘合自動車さんが、汽車ぽつぽのおうちへあそびにいつたのですつて。

『汽車ぽつぽさん、こんにちは。』

『だれだい。なあんだ乘合か。お前さんか、そんなちつぽけなからだをしてゐて、お尻ばつかり大きくて、がたがた〳〵〳〵うごいてだめだい。僕なんか見ろ、こんなに大きいぞ、ほーら、長いぞ（兩手をひろげてからだをのばす）あるくことだつて早いぞ。ぽーッ、ぽーッ、しゅッ、しゅッ！　くやしけりやかけつくらをしてみろ。』

つて汽車ぽつぽさんがいつたんです。

『へえ、汽車ぽつぽさん、そんなにゐばるもんぢやありませんよ。僕だつて、ずいぶん早いんですよ。かけつくらして見ませうか。』

『なんだ、なまいきな、かけつくらをすると。ようし、それぢあかけつくらをしよう。さあ、こゝが東京驛だよ。むかうに見えるのは横濱だよ。いゝかい、ちやんと並んで。そら、よーい、ドンー』

（猛烈に）　ぽーッ、ぽーッ！

しゅーッ、しゅーッ！

ぽーッ、ぽーッ！　しゅッ、しゅッ！

ぽッぽッ、しゅッしゅッ！　ぽッぽッ、しゅッしゅッ！

ぽぽしゅしゅ、ぽぽしゅ、ぽぽしゅしゅ！

ぽッぽッぽッぽッ！

汽車ぽつぽさんが大いそぎで走つていきました。そのあとから、乘合さんも、

ぶーぶー、ガタンガタン！

ぶーぶー、ガタンガタン！

と走つていきました。

「ビューツー　大森！」

「あゝ、もう大森か。あんまり走つたんでくたびれちやつた。どれ一休みしよう。乘合の奴、どこにねるだらう。きつと今ごろは、品川あたりでぶーぶーガタンガタン、ぶーぶー、ガタンガタンやつてねるんだらう。……おや、なんだかねむくなつてきたよ、あ、ねむい、ねむい。どれどれ、ちよつとおひるねをしませう。どうせ乘合さんが、おひつけやしないから大丈夫だ。ぐーツ、ぐーツー、ぐーツ、ぐーツー」

汽車ぽつぽさん、いゝきもちさうに、ねんねをしてしまひました。そのあとから、乘合さんが、ぶーぶー、ガタンガタン、ぶーぶー、ガタンガタン！　と走つて來ました。

ぶーぶー、ガタンガタン！

ぶーぶー！　ガタンガタン！

乘合自働車さん大いそぎで走つて來ました。

そのあとで、汽車ぽつぽさんが、目をさまして、

「あーツ、あーツ、ずゐぶんたくさんねた。どれ、出かけることにしませう。」

（緩漫に）　ぽーツ！　ぽーツ！

しゆーツ！　しゆーツ！

ぽツぽツ！　しゆツしゆツ！

ぽぽしゆしゆ、ぽしゆしゆ！　ぽぽしゆしゆ、ぽぽしゆしゆ！

ぽツぽツぽツぽツぽツ！

ヨコハマ！

やれ〳〵、やつと横濱へ來た。

しゆーツ、しゆーツ！

と息をしてゐますと、向ふから自働車さんが、

「汽車ぽっぽさん、ずいぶんおそいですね。僕さつきから、こゝでまつてゐたんですよ。」

「おや、自働車さん、僕より先に來てゐたのかい。こいつは失敗々々。」

ぽッぽッ、しゅッしゅッーと煙をだして汽車ぽっぽさんにげていつてしまひましたとさ。

それでおしまひ。

〔註〕これは著者の創作、兎と龜のお話を作りかへたものです。

大水のはなし

雨こんがざあざあざあざあざあふつてきました。

お水が、庭の中にいつぱいたまりました。

蛙がびよんびよん〳〵はねてゐます。

なめくじがによろ〳〵とはつてゐます。

ノアさんが、おえんがわにすはつて、それを見てゐました。

（歌）雨がふります。

雨がふる。
いやでもおうちで
あそびましよ。
千代紙をりましよ
たゝみましよ。

ざあざあ、ざあざあざあざあざあざあざあと雨こんがふりました。

お水が、おえんがわの上まで上つてきました。

「あらあら、大へんだわ。お水がおえんがわの上まで上つちやつたわ。僕のご本がぬれてしまふ。僕のおふとんもぬれてしまふ。大へんだ。大へんだ。」

雨こんが、ざあざあざあざあ、ざあざあざあざあふつてきました。

お水が、お机の上まで上つてきました。

「あらあら大へんだわ、お水がお机の上まで上つて來たわ、僕のお家が流れてしまふ。どうしようかしら。あああそこに、神様のお舟があるわ。あのお舟のところへ行かう。あのお舟のと

こへ行かう。』

ノアさんが、お舟の方へはしつていきました。

さうすると、むかうから、鼠さんが、ちゆうちゆう〳〵つてとびだしてきました。

『あらあら、大水だ、大水だ、大へんだ、僕のお家が流れてしまふ。ノアさん、僕もつれていつて。』

『ああ、よしよし、お前も一しよにおいで。』

さうすると、今度は、むかうから、猫さんが、にやあ〳〵、にやあ〳〵となきながらとびだしてきました。

『あらあら、大へんだ、大へんだ、大水だ、私のお家が流れてしまふ、ノアさん私もつれていつてよ、私もつれて行つてよ。』

『あゝよし〳〵お前も一しよにおいで。』

さうすると、今度は、むかうから、ワンワンがきました。

『ワンワン、ワン〳〵、大へんだ、大へんだ、僕のお家が流れてしまふ。ノアさん、僕もつれて行つて。』

『あゝ、よし〳〵、お前もおいで。』

さうすると今度は、むかうから牛さんがきました。

『もオン、もオン、大へんだ、大へんだ、大水で僕のお家が流れてしまふ。ノアさん、僕もつれて行つて、僕もつれて行つて。』

『あゝよしよし、お前も一所にこい。』

さうすると今度は、むかうから兎さんが、ピョン〳〵、ピョン〳〵はねてきました。

『大へんだ〳〵、大水でお山が流れてしまふ。ノアさん、ノアさん、僕もつれて行つて。僕もつれて行つて。』

『あゝよしよし、お前も一所においで。』

さうすると今度は、むかうからライオンさんがきました。

『大へんだ、大へんだ、大水で僕のお家が流れてしまふ。ノアさん、僕もつれていつて。僕もつれて行つて。』

『あゝよしよし、お前もおいで。』

今度は象さんが來ました。

『大へんだ、大へんだ、大水で僕のお家が流れてしまふ。僕もつれて行つて。』

『あゝよしよし、お前も一所においで。』

さうして、みんなノアさんと一所にお舟の中に入りました。

さうすると、

『どぶーん、どぶーん。』

と大波がうつて、お舟が、

ゆらゆらゆらゆらとゆれだしました。

さうしてむかうの、たかい〳〵お山のてつぺんまでゆきました。

お山のてつぺんには、大水がなくなつて、お花がたくさんさいて、鳥がぴい〳〵〳〵〳〵ないてゐました。

『やあ、こゝには、水がないぞ。出てこい、出てこい、あそばう、あそばう。』

と、ノアさんがよびました。

ねづみさんが、ちゆう〳〵ちゆう〳〵つて出て來ました。猫さんが、にやオ〳〵にやオ〳〵と出てきました。ワン〳〵さんが、ワン〳〵ワン〳〵つて出てきました。牛さんがモオン、モオンつて出て來ました。兎さんがぴよん〳〵はねてきました。ライオンさんも、象さんも、みんな出て來ました。

さうして、歌をうたつて、ダンスをしてあそびましたよ。面白い〳〵。

〔註〕　これは私の拙い創作。ノアの話を作りかへたものです。

新しい電車

寒い風が、ぴゅーぴゅーと吹いてゐました。

此の間、初めて出來た、新しい電車が町の中を走つてゐました。青い體を、きらきら光らせて、ゴーガタン、ゴーガタンと音を立て敷石の上のレールの上を威勢いよく走つて行きました。

冷たい風が電車の、ま正面から吹きつけました。

『おお寒いな、寒いな。こんなに寒いのなら、あの車庫の中から出て來るのではなかつた。』

と新しい電車は困つた顏をして、立ち止りました。古い電車は、にやりにやりと笑ひながらきたない埃りだらけの體を、ゆすぶつて、ゴトリゴトリと音をさせてのろのろ走つて行きました。

新しい電車は古い電車のにやり、にやりと笑つたのが氣に入りませんでした。

『なんだ僕の事を笑つてゐるな。僕の事を弱虫だと思つてゐるのだな、何が、あいつになんか、敗けるものか。』

さう、いつた時に又劇しい風がびゆーつと顏に吹きつけました。新しい電車は大そう怒つて

『こんな風位いなんだ。』

と、どなりながら、めくらめつぱうに、走り出しました。すると、曲り角の所でボンと大きな音がして、ポールが、はづれてしまひました。

新しい電車は、膽玉の、つぶれる程驚きました。道の上にいつぱいに、かけてある電線は、

地震の時のやうに搖れました。

『誰だ。誰だ。ポールなんか、はづしたのは。そそつかしい奴だ。』

とあつちからも、こつちからも、どなり出しました。どの電車もどの電車も立ち止つて、ふりかへつて新しい電車を見てゐるようでありました。新しい電車は本當に、きまりが惡かつたでせうね。だから誰でも氣短かをしてはいけません。

〔註〕著者の創作。氣みじかな子供におはなししてあげて下さい。

ひい子ちやんのおはなし

むかしむかし、あるところにお母様がありました。そのお母様は、子どもがなかつたのです。子供のないおかあさま、なんて、おかしいでせう。どこのお母さまだつて、みんな子どもがありますでせう。それだのに、そのお母様には子供がなかつたのですよ。だものですから、そのお母さまは、ある日、お日さまのところへいつておねがひいたしました。

『お日さま、お日さま、あのウ、わたし、子どもがなくて、さびしくて〳〵、仕方がないので

す。どしやうですから、小さいかはいらしい、女の赤ちやんを生ませて下さいな。その代り、十歳になりましたら、きつと、お日様に返してあげますから。』

『あゝ〳〵、よし〳〵、それでは小さいかはいゝ赤ちやんを生ませてあげますよ。そのかはり十歳になつたらかへすのですよ。分りましたか。あゝ、分つたらよろしい、安心してお歸りお歸り。』

とお日さまがおつしやいましたので、お母様は大へんよろこんで、お家へかりました。さうすると、お母さまのおぼんぼんが、だん〳〵大きくなつて、本當に、小ちやい可愛らしい女の赤ちやんが生れました。

『まあ、こんな可愛らしい赤ちやんが生れたわ。うれしいな〳〵。お日さまからいたゞいたのだから、ひい子ちやんと名をつけませう。』

と、その赤ちやんにひい子ちやんと名をつけて、おいしいおつぱいをたくさんあげましたからひい子ちやんは、すく〳〵と大きくなりました。

その中に、ひい子ちやんが十歳になりました。ある日のこと、ひい子ちやんが、野原に行つて草花をつんで遊んでゐますと、きれいな〳〵、ピカ〳〵光る、まあるいお顔の、白いひげの生えた、お爺さんが、いきなりひい子ちやんのそばにきて、

『ひい子ちやんや、ひい子ちやんや、お家へかへつたら、お母さまにおつしやい。あのひい子ちやんは、もう十歳になりましたよつて……』

といひました。

ひい子ちやんは、お家へかつて、

『あの、お母様〳〵、野原でお花をつんでゐましたらね、大きなおぢいさんがきましたよ。』

『えツ、お爺さんて、どんなお爺さん？』

『あの、ぴか〳〵光る、まあるいお顔ですよ。そして、長い、白いひげがはえてゝよ。』

『えツ、まあるい、ぴか〳〵ひかるおかほ、しろいながいおひげ、そしてなんと言つたの。』

『あのね、お家へかつたら、ひい子ちやんはもう十歳になりましたつて、お母さまにおつしやいつて。』

『あら大へんだ。お日さまが、ひい子ちやんをとりかへしにいらしつたのだ。ひい子ちやん、

ひい子ちゃん、もう決して外へ出てはいけませんよ、お日様につれて行かれてしまひますよ。外へ出ないで、お家の中にかくれてゐるのですよ。さあ、こちらへいらつしやい。』

と、ひい子ちゃんを、せまいお家の中へ入れて、戸をしめて、かぎをかけてしまひました。

まあ、ひい子ちゃんは、どんなにおどろいたでせう。

『もう、お日様がいらしたつて大丈夫だ。どこからも入れるものか。』

と、お母さまはすつかり安心してゐましたが、だめでした。お母様はかぎの穴をふさぐのを忘れてゐました。お日様は、みごとな細い光になつて、そのかぎの穴から、お家の中へ入つてきて、ひい子ちゃんをつれていつておしまひになりました。

お日様のお家へまゐりますと、お日さまは、ひい子ちゃんにいろ〳〵な御用をさせなさいました。ある日のこと、お日様が、

『ひい子ちゃんや、畑へいつて、麥わらをとつておいで。』

とおつしやつたものですから、

『はい〳〵、かしこまりました』

と、畑へ出てゆきました。むぎわらの上を、ひい子ちゃんが、ふんであるきますと、麥わらが、きゆう、きゆう、きゆう、きゆうと鳴りました。ひい子ちゃんは、それをきくと悲しくなりました。

『あらあら、麥わらが、きゆう、きゆうつて泣いてゐるわ。わたしがおかあさまのことをおもつて、ないてゐるのとおなじだわ。』

さういつて、ひい子ちゃんは、よけいに麥わらをふみつけました。きゆう、きゆう、きゆうと麥わらはいくらでもなるのです。ひい子ちゃんは、とう〳〵お家へかへるのをわすれて、もうあたりがくらくなりかけたころになつて、あはて〻お家へゆきますと、お日さまが、

『ひい子ちゃんや、どうしてそんなにおそくなつたのですか。』

とおききになりました。ひい子ちゃんは、仕方なしに

『だつて、私のおくつが大きすぎて、あるきにくいのですもの。』

といひますと、お日さまは、

『お〻そうか、それではおくつを小さくしてあげよう。』

とおつしやつて、ひい子ちゃんのお靴を半分に切つておしまひになりました。

そのあくる日のことです。お日さまは、ひい子ちやんをおよびになりました。

『ひい子ちやんや。川へいつて、お水をくんでいらつしやい。』

『はい〳〵、かしこまりました。』

と、ひい子ちやんは、バケツをもつて、川へゆきました。川へゆきますと、お水が、さあざあ、さあざあと流れてゐました。

『あら〳〵、お水が、さあ〴〵、さあ〴〵つて泣いてゐるわ。きつと、お母様も、私のことを心配して、毎日泣いていらつしやるのだわ。』

といひながら、ひい子ちやんは、川のふちに腰をかけ、足をお水につけて、ばちや〳〵とならしながら、いつまでも〳〵泣いてゐました。それで、お家へかへるのがおそくなつてしまひました。お日さまは、

『ひい子ちやんや、どうしてこんなにおそくなつたのですか。』

とおつしやいました。

『だつて、私のきものが、あんまり長すぎて、あるきにくいのですもの。』

と、ひい子ちやんがいひましたら、お日さまは、

『おゝ、さうか、そんなに着物が長くてはあるきにくいだらう。』

と、はさみをだして、ひい子ちやんのきものを、みぢかく、きつておしまひになりました。

それでも、お日さまは、なんだか、をかしいとおもつたものですから、ある日また、ひい子ちやんに、むぎわらをとりにゆかせました。さうして、あとからこつそりこつそりとついてゆきますと、ひい子ちやんが、むぎわらをふみつけては、

『お母さまのところへゆきたい、お母さまのところへゆきたい。』

といつて、泣いてゐましたので、お日さまもかはいさうになつて、ひい子ちやんを、お母さまのおうちにかへすことにしました。

お日さまは狐さんをよんで、おつしやいました。

『これ〳〵、狐、このひい子ちやんをお母様のお家へつれてゆきなさい。』

『はい〳〵、かしこまりました。』

『だが、途中でおなかゞすいたらどうする。』

『途中でおなかゞすいから、僕、ひい子ちゃんをたべてしまひます。』
『だめだ、だめだ、お前みたいなものには、ひい子ちゃんをつれてはいけない。……これ〳〵狸や狸や、こゝへ來なさい。』
『はい〳〵、何の御用でございます。』
『お前、ひい子ちゃんをつれて、お母様のお家へゆけますか。』
『行けますとも、僕つれて行つてあげますよ。』
『だが、とちうでおなかゞすいたらどうする。』
『途中でおなかゞすいたら、僕、ひい子ちゃんをたべます。』
『あツ、だめだめ、お前もだめだ。……これ〳〵、兎さんや兎さんや。』
とよびますと、兎さんが、ぴよんぴよん、ぴよんと飛んでまゐりました。
『はい〳〵、何の御用でございます。』
『お前、ひい子ちゃんをつれてお母さまのお家へゆきなさい。』
『はい〳〵、かしこまりました。』

『だが、もしも、途中でおなかゞすいたらどうしますか。』
『途中でおなかゞすきましたら、草をとつてたべます。』
『あゝ、よし〳〵、それではつれて行つておくれ。』
そこで、ひい子ちゃんは、兎さんにつれられて、お母さまのところへかへることになりました。
兎さんは、ひい子ちゃんをおんぶして、ぴよーん、ぴよーんと走りだしました。けれども、お母さまのお家はずゐ分とほかつたものですから、兎さんはすつかりおなかがすいてしまひました。そこで兎さんは、
『ひい子ちゃんや、この木の上にのぼつてまつていらつしやいね。私は、ごはんをたべてまゐりますからね。』
といひました。
『えゝ、早くたべていらつしやいね。』
と、ひい子ちゃんは、木の上にのぼつて、ひとりでまつてゐましたが、たいくつなものです

から、

『うーさぎ、兎、
何見てはねる
十五夜お月さん
見てはねる
ア、ピョン〳〵〳〵』

なんて、歌をうたつてゐました。すると、だしぬけに木の下で、

『これ〳〵、ひい子ちゃんや。』

といふこゑがしたものですから、びつくりして、下を見ますと、こわい〳〵顔をした鬼ばばあが、まつかな目をむいて、こつちを見あげてゐました。

『あらたいへんだ、兎さん、兎さん。』

といつて、ひい子ちゃんは、木の幹にかぢりついてしまひました。

鬼ばばあは、

『ひい子ちゃん、下りていらつしやい。』

といひました。

『いやですよ、私降りませんよ。』

『降りなければ木をきりたほしてしまひますよ。』

『切つてもいゝですよ。』

といつて、ひい子ちやんは、ます〳〵、その木にしがみつきました。

『よし、それならば伐つてしまふぞ。』

と、鬼ばばあは、斧をふりあげて、ストーン、ストーンと木を伐りはじめました。

けれども、この木は、なか〳〵大きな木でしたから、ちよつくらちよつと、きれませんでした。

『えゝ、いまいましい。よし、それなら、うちからのこぎりをもつてくる。』

といつて、お婆さんは、のこぎりをとりにゆきました。ひい子ちやんはそのあとで、

『兎さん、兎さん、早くきて下さいな。』

と叫びました。兎さんはそれをきゝつけて、走つてきました。

『ひい子ちゃん、どうしたの。』

『大へんですよ、鬼ばばあが來たのですよ。今、お家へのこぎりをとりに行つたのですよ。またすぐ歸へてきますよ。』

『わーツ、そりや大へんだ。早くおんぶしなさい。』

と、ひい子ちゃんをおんぶして、兎は一目散に、ぴよーン、ぴよーンととびだしました。

鬼ばばあは、すぐにのこぎりをもつて、お家からかへつてきましたが、ひい子ちやんがゐなくなつたので、大へん怒りました。

『ウゝム、いま〳〵しい奴だ。よし追ひかけていつて、つかまへてやらう。』

と、すたこら〳〵走りだしました。

しばらくゆくと、多勢の人が、豆まきをしてゐました。

『おい〳〵、だれかこの道を通つたものはないか。』

と鬼ばばあはききました。

『あの鬼ばばめ、さつきの子どもを追ひかけてきたのだな、わるい奴だ、みんな知らんふりをしてをれ。』

と、誰も返事をしませんでした。

『おい〳〵、誰か、この道を通つたものはないか。』

と鬼ばばあは又きゝました。

『おれたちは、豆まきをしてゐるのだよ。』

とお百姓は答へました。

『そんなことをきゝはしない。誰か通らなかつたかと云ふのだ。』

『お前はつんぼか、おれたちは豆まきをしてゐるのだ。』

とお百姓たちは、又しらばつくれていひました。

そのあひだに、ひい子ちやんをのせた兎はどん〳〵走つてゆきました。

けれども、鬼ばばあの足は、とても早いのですから、まもなく、ひい子ちやんたちの見えるところまで、追ひかけてきました。

『ヤーツ、大へんだ、鬼ばばあがきた。』
鬼はおどろいて、又ビョーンととびだしました。鬼ばばあは、
『さあ、今度こそはにがさないぞ。』
と、スタコラ〳〵走りだしました。

ビョーン、ビョーン、
スタコラ、スタコラ、
ビョーン、ビョーン、
スタコラ、スタコラ、

だん〳〵、鬼ばばあの方が、追ひつきさうになります。
お母様のお家は、むかうのお山の上にありました。赤いお屋根の、青いお窓の、きれいなお家が、とう〳〵、むかうに見えだしました。御門のところにすはつてゐた犬は、ひい子ちゃんを見ると、
『ワンワンワン、ひい子ちゃんがきた。』

とほえたてました。
お窓にすはつてゐた猫は、
『ニヤオ、ニヤオ、ニヤオ、ひい子ちゃんが來た。』となきました。
お家根にとまつてゐた鶏は、
『コケコツコー、ひい子ちゃんが來た。』
となきました。
お母様は裏のおえんがはで、お針をしていらつしやいましたが、
『えツ、何ですつて、ひい子ちゃんが來たですつて？　ひい子ちゃんは、お日さまのところへつれてゆかれたのですもの、來るものですか。』
と泣いていらつしやいました。すると又、
『ワンワンワン、ひい子ちゃんが來た！』
『ニヤオニヤオニヤオ、ひい子ちゃんがきた！』
『コケコツコー、ひい子ちゃんが來た！』

と、みんなしてよぶのです。

『また、本當にひい子ちゃんが來たのかしら。』

とあはてゝお玄關の戸をおあけになつたとき、兎は、ひい子ちゃんをおんぶしたまゝ、ビョーンとお家の中へとびこみました。そのあとから鬼ばばあが、手をのばして、兎の尾をつかまへやうとしましたが、お母様がびつくりして戸をぴしやりとしめてしまひましたので、兎のしつぽがぷつりときれて、鬼ばばあの手にのこりました。

『ああ、怖かつた。お母さん、お母さん。』

と、ひい子ちゃんは、お母さまにすがりつきました。

『まあ、よくかへつてきたのね。ひい子ちゃん、ひい子ちゃん、ひい子ちゃん。』

『お母さん、お母さん、お母さん。』

『ひい子ちゃん、ひい子ちゃん、ひい子ちゃん。』

と二人は、だきあつてよろこびました。

兎さんの尾はそのときからすつかり短くなつてしまひましたので、お母様は、なくなつた尾のかはりに、きれいな銀の絲のかざりをつけてあげました。そして、いつまでもひい子ちゃんのお友だちにして、可愛がつてあげました。犬さんも、猫さんも、鷄さんも、この新しいお友たちができたので大さうよろこびました。

〔註〕これはランゲの童話集によつたもので、あまり世間に知られてゐない話ですが、幼稚園から小學校初年の子供に大いへんよろこばれるお話です。

狼と子山羊

或る所にお母さん山羊と七匹の子山羊とがゐました。

お母さんの山羊は或る日お使ひにゆかうと思つて子山羊達に言ひました。

『みんなよくお留守居をしておいで。お土産をもつて來ますよ。若し留守の間に狼が來ても、戸をあけてはいけませんよ。あいつが來るとあなた方をみんなたべてしまひますよ。あいつはこわい聲で眞黑な足をしてゐますから氣をつけなさい。』

『お母様、大丈夫ですよ。安心していつていらつしやい。』

と小山羊達は言ひました。お母さんは安心して出かけました。

一時間ばかりたつと窓のそとでこわい聲が聞えました。

『子供達や、お母さんが歸りましたよ。あけておくれ。』

子供達はその恐ろしい聲で狼が來た事を知りました。

『駄目だい、駄目だい。うちのお母さんはそんないやな聲ぢやないや。お前は狼だ。』

狼は町へ行つて、のどのよくなる藥を買つて飲み、又山羊のおうちへ行き、

『子供達や、お母さんが歸りましたよ。あけておくれ。』

と言ひながら眞黑な大きな足を窓のところへ出しました。子山羊達はそれをみると、

『駄目だい、駄目だい。うちのお母さんはそんな眞黑な足ぢやあないや。お前は狼だ。』

と言ひました。狼は町の粉屋へ行つて足にうどん粉を一つぱいふりかけて貰ひました。

それから山羊の所へゆき、『子供達や、お母様が歸りましたよ。戸を明けておくれ。』

と言つて眞白になつた足を窓の上から出しました、子供達は、

『やあ、お母さんだ、お母さんだ。』

と喜こんで、戸を明けますと、狼はいきなり飛びこんで來てかたつぱしから子山羊達をつかまへ、まるのみにしてしまひました。一番小さい子山羊だけは時計の中にかくれてゐましたので狼に見つかりませんでした。

しばらくたつて山羊のお母さんは歸つて來ました。

みるとうちの戸はあけはなしになつてをり、うちの中は机も、椅子も、みんなひつくりかへつてゐて子供達の姿はどこにも見えません。

お母さんはびつくりしてそこへ坐つておい〳〵と泣き出しました。すると

『お母様、僕は時計の中にゐますよ。』といふ聲が聞えました。

お母さんはすぐに時計をあけてみますと、中から一番小さい子山羊が飛び出して來ました。

そして狼が來て兄さん達を食べた事を話しました。

お母さんは大そう腹を立てました。そして小山羊をつれて狼を探しに出かけました。狼は牧場の青い草の上にねてゐました。

そばへよつてよくみると、狼のおなかがむく〳〵と動いてゐました。それは狼が子山羊達を

まるのみにしたからです。お母さんはそれを見ると、

『おや、未だ子供達は生きてゐるよ。よしよし、よい事がある。』

と前掛のかくしから鋏を取り出し、狼のおなかを切りました。さうすると子山羊が一匹ぴよこんとでて來ました。もう少し切ると、又一匹でて來ました。そしてとう〳〵六匹の子山羊がみんな生きたまゝで出て來ました。

お母さんは子供達にむかひ、

『さあみんなして大きな石を澤山もつてきなさい。』

と言ひました。子供達はみんな大きな石を運んで來ました。お母さんはその石を、狼のおなかに入れ、その上から糸でおなかを縫ひました。

しばらくすると狼は目をさましました。そして大そうのどがかはいたので水を飲まうと川のそばへゆきました。

『なんだかおなかがばかに重い。へんだな、へんだな。』

と言ひながら水を飲まうとしますと、石の重みでまつさかさまに川の中におちて死んでしまひました。小山羊達は手をたゝいて喜びました。

〔註〕名だかいグリンムの童話、このお話くらゐ幼児によろこばれるお話はあまり多くはありませぬ。模範的な幼児童話です。

チツクさんとタツクさん

チツクさんとタツクさんとは、二人きりで一つのお家に住んでゐます。さうして、ちつとも休みなしに話をしてゐるのです。夜だつて眠らずにお話をしてゐます。

其のお話といつたら、早くて早くて、とても人には聞きとれない程です。そして、ひとことひとこと、チツクと、タツクを附けるので、たいていの人には只チツクタツク、チツクタツクだけかきこえません。けれども私はお耳が大變よいので、チツクさんと、タツクさんとの、お話がよく、わかるのです。

『おはやうチツク。』『おはやうタツク。』

『今日はチツク。』『いいお天氣だタツク。』

『赤ん坊がチック。』『泣てるタック。』
『お犬がチック。』『吠てるタック。』
なんて朝から晩まで話をしてゐるのです。
隨分おかしな兄弟ではありませんか。
今朝私が新聞を讀ながら机のそばに座つてゐますと、チックさんと、タックさんが、こんな事を言つてゐましたよ。
『僕等は、チック。』『何時でもタック。』
『朝からチック。』『晩までタック。』
『お話をしてチック。』『暮すのだタック。』
『人間はチック。』『兄弟でもタック。』
『學校に行たりチック。』『會社に行たりタック。』
『お嫁に行たりチック。』『兵隊に行たりタック。』
『別れてしまふチック。』『つまらないなタック。』
『僕等は、いいチック。』『本當にいいタック。』
『僕等は、しあはせだチック。』『本當に、しはせだタック。』
ですつて。私は吹出して、しまひました。

〔註〕これはアメリカの童話作家ボンナー女史の作によつたもので、幼兒に大へんよろこばれるお話です。

狐とライオン

ある時狐が油屋へ行つて油を一升買ひました。それから金物屋へ行つてお鍋を一つ買ひました。狐はそれを持つて海の、そばに行き、火をたいて、油を煮立てました。
それから狐はひらめを呼出し、
『魚達は皆濱邊へ出てこいと王様のおほせだ。御褒美を下さるのだ。ひらめ君、お友達を、呼び集て、くれたまへ』
といひました。ひらめは本氣にして早速、澤山の魚を、つれて來ました。狐は、それを、つかまへて、かたつぱしから、お鍋の中に入れ、みんな天ぷらにしてしまひました。

狐は天ぷらを袋に入れ、それを、かついで森の中へ歸つて行きました。すると途中で、であつたのはライオンです。

『やあ狐君。久しぶりだな時にお前の、かついでゐる物はなんだい。』

と、きかれて狐は、びつくり、しましたが、

『あ、これは私のおかあさんの骨ですよ。

今年は、おかあさんが亡くなつてから十年目になるのです。それで立派な、お墓を立てようと思つて掘出して來たのですよ。』

といひました。

『ほう、それは感心だな。』

とライオンは感心して行きました。そこで狐は袋を地べたに下し、天ぷらを出して、おいしい、おいしいと、ほつぺたを、たたいて喰べてゐました。後でライオンは

『あの狐のずるめ、おかあさんの骨だなんて、なんだか、あやしいぞ。』

と、こつそり戻つて見ますと狐は、さもおいしさうに、天ぷらを、たべてゐるのです。

ライオンは、それを見て

『おいおい狐君、おかあさんの骨つて、そんなにおいしい物かい。』

と、だしぬけに聞きました。狐は、びつくりしましたが、又しらばつくれて、

『なに、さつきのは冗談ですよ。さあさあ、お上りなさい。これは天ぷらです。』

と天ぷらの袋を出しました。

ライオンは大喜びで狐が、まだ三つしか、たべない内に、袋の半分も、たべました。狐は、あきれて、口の中で

『隨分大喰ひの奴だな。』

と、いひました。ライオンは、ききつけて、

『え、なんですつて狐君。』といひました。

『いや、あなたの食べ方が、さつぱり、おそいと言つたのですよ。』

といつてゐる内にライオンは天ぷらを皆食べてしまつて、狐の食べるのがなくなつて、しまひました。

〔註〕ノールウエーのアスビヨルゼンの童話の一節をとつたものです。

めん鳥と小麥

一はの、めん鳥が、ひよこを、つれて歩いてゐますと、道の上に小麥が落ちてゐました。

『誰か、この小麥を蒔きませんか。』

とめん鳥は、いひました。

『私達は、そんな事は、いやですよ。』

と、がてうが、いひました。

『私達も、そんな事は、いやですよ。』

と、あひるが、いひました。

『それでは私が蒔きませう。』

と、めん鳥は、いつて、その小麥を土に蒔きました。

小麥は芽を出して大きくなつて實が、なりました。めん鳥は、その時に、いひました。

『誰か、この小麥を粉屋へ持つて行くものは、ありませんか。』

『私は持つて行きませんよ。』

と、がてうがいひました。

『私も持つて行きませんよ。』

と、あひるが、いひました。

『それでは私が持つて行きますよ。』

と、めん鳥は小麥を粉屋へ持つて行きました。

そして、きれいな、うどん粉にしてもらつて、それを持つてお家へ歸つて來ました。

『誰か、この、うどん粉で、お菓子をこしらへる、ものは、ありませんか。』

とめん鳥は、ききました。

『私は、お菓子なんか、こしらへません。』

と、がてうはいひました。

『私もお菓子なんか、こしらへません。』

とあひるは、いひました。

『それでは私が、こしらへませう。』

と、いつて、めん鳥は、そのうどん粉で、おいしい、お菓子を澤山こしらへました。そして

『お菓子を食べるのは誰ですか。』

といひました。すると、がてうとあひるは、大喜びで

『私はお草子を食べますよ。』

『私もお菓子を食べますよ。』

と、いつて走つて來ました。けれども、めん鳥はいひました。

『いいえ、あなたには、あげませんよ。このお菓子は私が一人で、こしらへたのですから、私が食べますよ。さあ、子供や、おいしい、お菓子を食べませうね。』

そして、めん鳥はひよこ達と一緒に、その、おいしい、お菓子を皆、食べてしまひました。

あひると、がてうは、よだれを垂しながら、それを見てゐました。

〔註〕ブライアントの口演童話集からとつたものですが、巧みに會話を使つてあり、くりかへしの面白味があつて、子どもをひきつける上に、麥粒から麥の芽が出、麥が實り、粉が出來、お菓子が出來るといふ變化に、自然界を巧みに敎へ、なまけ者の鷺鳥と家鴨がお菓子たべることが出來なかつたところに、巧まざる敎訓があり、まことにおもしろいお話です。

風の子供

ある日風のお父様は、子供達にいひました。

『今日はお父さん忙しいのだからね、皆おとなにしてゐなければいけませんよ。』

『おとうさん、どうしてそんなに忙がしいの。』

と子供達は聞きました。

『お父さんは森に行つて大きな古い、くさつた、枝を、はらひ落して來るのだよ。そうして、おかないと人の頭の上に落ちたりしてあぶないからね。』

さういつてお父さんは出て行きました。

いたづらつこの風の子達は

『僕等も何か、しようや。』

『何をして遊ばう。』

『何んでもいいから吹き飛ばしてやらう。』

と相談して一緒に、でかけました。

大きなお家の窓の前を通つた時、風の子達は、中をのぞきこみました。

『なんにも吹き飛す物がないや。』

といつて、行つてしまはうと思つた時机の上に置いて、あつた、紙がふわりふわりと動きました。

『あつ、あいつを吹き飛ばしてやらう。』

『面白い面白い。』

風の子達は一時に、あばれだして、紙を吹きとばしました。

紙は部屋中いつぱいに飛んで、ひらひらと、まひました。風の子達はきやつきやつと騒ぎながら、その中を、とびまはりました。

ね、風の子達は、そんな、いたづらをするのですよ。だから紙を、とばされないように、文鎮を、のせて置くのですよ。

〔註〕ボンナー女史の作、自然譚であつて、また文鎮の效用を子どもに敎へた面白い話です。かういふ風に實生活に必要な知識を、童話によつて子供に與へることも出來るのです。

目と耳と口

ある時、目と耳とが口に向つていひました。

『僕達は、しじふ物を見たり、音をきいたりして、せつせと働いてゐるのに、お前は何もしないでおいしい物を一人で食べてばかりゐるのは、どういふわけだ。食はずにゐるかと思ふと、べちやくちやしやべるし、しやべりあきたかと思ふと、あくび等をする、本當に行儀の惡い奴だ。僕達はお前みたやうな者と一緒に仕事をするのは嫌だから、これからは見たりきいたりする事をやめてしまふぞ。』

『皆さん、そんなに私を、いぢめないで下さい。私は自分で食べたくて物を食るのでは、あり

ません。御主人様のおいひつけで食べるのです。もし皆さんのお氣にいらなければ、私は今日から物を食べる事をやめてしまひますから、皆さんが私のかはりに食べて下さい。』

と口はいひました。

『よしよし、それでは今日から何も食べるな。食べたら、ひどい目にあはすぞ。』

と耳と目とはいひました。

その日から、どんなに、おいしい御馳走を持つていつても、口は、しつかりと門を閉めて中に通しませんでした。耳と目とは、大變よい事をしたと思つて喜んでゐました。けれども、それから三日ばかり、たちますと、目は、くらくらして物が見えなくなつてしまひました。耳はがんがん鳴つて音が、きこえなくなつてしまひました。

『どうしたのだらう。どうしたのだらう。』

と耳と目とは不思議がりました。

その時口がいひました。

『それ、ごらんなさい。私が、なぜ物を食べるのか皆さんは、おわかりになつたでせう。私が物を食べるのは自分の爲ではありません。皆さんの爲なのです。私が物を食べなければ體は死んでしまふのです。私ばかりではありません。手でも足でも皆、めいめいの務めを、つくして體は生きて、いくのです。』

といひました。目と耳とは

『なるほど、これは私達が惡かつた。自分達ばかりが、働いてゐると思つて、ほかの人のは働きが、わからなかつたとは、馬鹿な事であつた。許して下さい。』

と、あやまりました。

〔註〕これはイソップや其の外の寓話にたくさん出てくるお話です。協力といふことを敎へたよい寓話です。

自慢くらべ

或る日封筒がいひました。

『僕はこんなに小さくても遠い所まで行るのだ。アメリカへだつてイギリスへだつて行けるの

だもの全く、えらいものだ。僕の兄さんなんか、つい此の間、ロシヤへいつたぞ。』

其の時机の上の小箱の中で

『あつはつはつはつ』

といふ笑聲がしましたので、封筒はふりむいてどなりました。

『誰だ笑つてゐるのは。何がをかしいのだ。』

すると又小箱の中から、

『馬鹿だな、お前は一人でどこへでも行けると思つてゐるが僕がお前の背中についてゐなければお前はお隣へだつて行けやあしないのだ。』といつたのは郵便切手でありました。

『な、な、なんだと、お前こそ俺のお蔭で旅が出來るのだ。僕が背中に乘せてやらなければお前は何時までも小箱の中で、あくびをしてゐるよりほかしかたがあるまい。』

二人して、しきりに議論をしてゐますと、筆立の中で

『わつはつはつはつ、なんといふ馬鹿者ばかり揃つてゐる事だらう』

と、どなる者があります。

『誰だい僕達を笑つたのは。』

『誰だい僕達を馬鹿者といつたのは。』

と郵便切手と封筒は大そう腹を立つて言ひました。

『お前達が、どこへ行かうと思つたつて僕が宛名を、書いてやらなければ、どこへも行けないのだ。』といつたのはペンでありました。

二人は顏を赤くして默つてしまひました。

世の中の仕事は大勢の者が、力を合せてするから出來るのです。

〔註〕これも協力といふことを敎へたおはなし。

賣られた熊

或る時、お百姓のお爺さんが畑へ行つて蕪の種を蒔いてゐますと森の中から熊が出て來て、のそり、のそりと、お爺さんに近づきました。

あんまり一生懸命に種蒔をしてゐたので熊が、つい後ろまで來たのを知らずにゐた、お爺さ

んは、はつと氣がつくと、びつくりして
『ひやあ大變だ熊さん勘辨してくれ。』
と其の場に腰をぬかしてしまひました。
『なに勘辨ならぬ、食べてしまふぞ。』
熊は大きな口をあけて、お爺さんの頭から、がぶりと食べてしまはうとしましたからお爺さんは地べたにはひつくばつて、
『熊さん御免なさい。そのかはり此の畑に蕪が、はえたら上の方を皆、お前さんにあげますからね。』といひました熊がそれを聞いて、『よしそれぢや蕪が、はえたら上の方をすつかり俺によこせ』
と言つて森に歸つて行きました。
やがて蕪が、はえだして、大きくなつて取り入れの時が來ました。お爺さんは蕪の葉つぱをすつかり切つて、車にのせて森の中にはこんで行き
『さあ、熊さんお約束通り蕪を持つて來ましたよ。』と言ひますと熊は、
『うん、よく持つて來たな。感心、感心。』と、大喜びで蕪の葉を、むしや、むしやと食べはじめました。お爺さんは畑へ戻つて蕪の根を掘り、車に乘せて町へはこんで行きました。
其の途中で熊が道ばたに飛び出し
『お爺さん、どこへ行くのだ』と聞きました。
『私は町へ行くのですよ。』
『其の車の上にのせてある物はなんだ。』
『これは、蕪の下の方ですよ。これを町の市場へ持つて行つて賣るのです。』
『なに、蕪の下の方に、こんな物がついてゐるのか。どれ一つ食べさせろ。』と、蕪を取つて、ばくり〳〵と食べました。
『やあ、こいつはうまい。葉つぱよりはこの方が、よつぽど、うまいじやないか。爺め。俺をだまして、あんな、まづい葉つぱを食べさせやがつたな。よしよしおぼえてをれ。こん度森へ來たなら、食ひ殺してやるから。』
と言つてぷりぷり怒つて熊は行つてしまひました。お爺さんは、それからはもう恐ろしくて

森に行く事が出來ません。其の内に、薪が、すつかり、なくなつてしまひましたが、木を取りに行く事が出來ませんので、しかたなしに、机を燃したり、腰掛を燃したり、しまひには、床板や、はめ板を、はがして燃したりしましたのでお家が、まるで鳥籠の様になつてしまひました。或る日、お爺さんが、縁の板をはがして燃やしてゐる所へ一匹の狐が通りかかりました。

『お爺さん、お爺さん、どうして縁板なんかを燃すのです。』と狐は聞きました。

『やあ狐さんか、あの熊の奴が俺を食ひ殺すとねばつてゐるのでこはくて森に行けないんだよ。』

『さうですか、それはお氣の毒ですね。ぢやあ私が、獵人に化けて行つて熊をおどかしてやりますから、かまはずに行つておとりなさいよ。』と狐は言ひました。

『さうかい。ぢやあよろしく賴むよ。』

お爺さんは早速車をひつぱつて森に行き鉞をふるつて、ぱちん〳〵と木を切りはじめました。熊はそれを聞くと、のそのそと穴の中から出て來ました。

『やあ、爺奴。やつて來たな。さあ約束通り食ひ殺すぞ。』と熊が恐しい聲でどなつた時、つい近くで「ドーン」と鐵砲の音がしました。

熊はびつくりして

『おいおい、爺い。其の邊に獵人がゐたかい。』

と聞きました。

『うむ、さつき、あすこで獵人にあつたよ。熊でも獅子でも狼でも象でも皆、打ち殺してしまふと言つてたよ。』

と言つてゐる所へ、むかふの木の間に獵人の姿が見えました。

『やあ、大變だ來た來た。一寸と俺を車の下にかくしてくれ。』と言ひながら熊は車の下にもぐりこんでしまひました。狐はそれを見て

『おいおい、爺さん。其の車の下にある物はなんだ。』と聞きました。

『これですか。これは薪ですよ。』

と爺さんは答へました。

『薪は車の上に乘せる物だ。』と狐はいひました。

『おい車の上に、のせろ。』と
熊は、こつそり言ひました、お爺さんが熊を車の上に乗せると狐は、
『薪はしばるものだ』と言ひました。
熊はそれをきいて
『おい、しばれ、しばれ』と言ひました。
お爺さんは太い縄を出して熊をすつかり車にしばりつけました。さうして狐と一緒に車をひつぱつて町へ行き其の熊を動物園に賣つてしまひました。

〔註〕北歐の動物譚、力よりも智慧の方が強いといふ思想は、童話の中にもつとも多くあらはれてゐる思想です。

大男の娘

或る所に七人の娘がありました。或る時の事お父様とお母様は遠國へ旅に出かけなくてはならない御用が出來ましたので娘達を呼んで言ひました。

『これこれお前達お父様とお母様は遠い國に旅をして來ますからね。おとなしくお留守居しなさい。物置の中にお前達の食べ物が三年の間食べる程ありますからね。それを食べなさい。それから大切な事はお父様とお母様の留守の間は決して戸を明けてはいけませんよ。外へ出てはいけませんよ。』

『はい〳〵、私達はよく氣をつけてお留守居しますよ。』と娘達は言ひました。

お父様とお母様は安心して出かけて行きました。娘達は二年の間おとなしく、お留守居をしてゐました。三年目になつた日に一番大きいお姉様がお二階の窓の戸を明けて往來を見ました。さうすると向ふの方に澤山のお店が見えました。

『あらあら一寸來て御覽なさい。あんなにお店があるわ。あんなにおいしさうな物があるわ。ほら林檎もあるわ、みかんもあるわ、お肉もあるわお菓子もあるわ。皆が買つてるわ。私も買ひに行かう、買ひに行かう。』

『私も行くわ、私も行くわ。』

『私もよ、私もよ。』

お姉様達はとう〳〵お玄關の方に走り出しました。一番小さい娘はびつくりして

『あらいけないわ、いけないわ。外へ出てはいけないつてお父様がおつしやつたのに。およしなさい、お姉様。』と引き止めました。

するとお姉様達は腹を立てて

『いいわ、あなただけ何も、食べずに居ればいいぢやないの。』と叱りつけて戸を押し明けて一時に外へ出て行きました。

やがてお姉様達はおいしさうなお林檎やお菓子や、お密柑を山の様に買ひ込んでお家へ歸つて來ました。けれども其の時魔法使ひのおばあさんが、皆の後からこつそりお家の中へ入つて來たのを知らずにゐました。

お姉様達は大きなテーブルの上に買つて來た物を、のせて、おいしい、おいしいと言ひながら、食べはじめました。其の時魔法使ひのおばあさんが、いきなり飛びだして、大きいお姉様から順順に一人殘らず食べてしまひました。

一番小さい妹娘はこれを見るとびつくりしてお家の外に逃げだしました。さうして夕方の町の中を足に、まかせてどこまでも、どこまでも走つて行きました。

やがて娘は大きな、お城の様な家の前に來ました。門が明いてゐましたからずん〳〵其の中に入つて行きました。

大きな大きな玄關を通つて行きますと其の奥に廣い廣い部屋がありました。

部屋の隅に大きな壺がありましたから、娘は其の中に入つて眠りました。

しばらくすると、ずしんずしんといふ地ひびきがして大きな大きな大男が此のお家へ入つて來ました。

『くふん、くふん！』大男は鼻を鳴しました。

『くふんくふん！　人臭いぞ、人臭いぞ。誰が僕の家にやつて來たかな。』

大男は部屋の中をあちこちと見まはして捜しました。

『おい誰だい。どこにゐるのだい。どうもしないから出ておいで。』

娘は默つて返事をしません。

『誰だい本當に、でておいで。俺は何も惡い事をしないよ。お前は年寄りかい。さうだつたら